

---

\*\*\*UNINSTALL\*\*\*

白波の使徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

\* \* \* U N I N S T A L L \* \* \*

### 【ノード】

N4510D

### 【作者名】

白波の使徒

### 【あらすじ】

俺は如月蒼夜。普通の、普通すぎる高校生だ。その普通さが今日の、退屈すぎる日常という、キツイ結果を招いているのだが、俺が何億年先になるか想像をめぐらせていたキセキの邂逅は、意外と近くにあったのだ。灯台下暗しつてやつさ。俺が前々から望んでいた、非日常との邂逅は、この時からいや、もう少し前から既に始まっていたのだ

## プロローグ

さて、今から昔話をじみつと語り。

昔話というからにはやはり昔々、と始めたいところだが、そしたら俺は今何歳だ、という話にならないので、初めに断つておくがこれは俺が小六のころの話だ。

そのときの俺は、今の俺からは見当も付かないほど活発で、それで純粋だったそうだ。

いつからだろう、こんなに毎日がつまらなく思つたのは……といつてもそれはそのときの俺の気持ちであつて、今の俺としては明確にその理由が分かっている。  
もつたibusついても仕方がない。

まあ、昔の世界へ漫りに行こうではないか。

まあ、これはあくまで俺の思い出だから、お前にどうせ何の面白みもない話に聞こえるだろうが、我慢して聞いてくれ。

忘れもしない、八月十七日。

仕事から妙に早く帰つてきた親父の顔が妙に嬉々としていて、すわ何事かと思いきや、彼は右手に紙切れをひらひらさせていた。それには『野球観戦招待券』と見て取れるゴシック体の文字が印刷されていた。

会社の同僚が急用で行けなくなつたためチケットを譲つてくれたのだ、と母に弁明する親父を田の端で捕らえながら、それなのに三枚も持つているなんて怪しいとは微塵も思わず、食い入るよつにそのチケットを見、俺は純粋に喜んでいた気がする。

そのチケットは当田の試合のもので、母はまた変なものを貰つてきて、とブーリングをしつつもどこか『機嫌そうにお弁当を作つた。そして滅多に着せてもらえないよそ行きの服と、どこから引張り出してきたか、埃だらけのグローブを持って、俺らは駅に急

いだ。

時間も少し遅めだったので球場の外には誰一人としていなく、聞こえてくる声援に催促されながら球場の中へ走りこんだ。

そして 愕然とした。

野球のことなんて、頭から吹っ飛んでいた。

球場を埋め尽くす、米粒のような人間どもが、向こうでうごめいていた。

呑まれそうな、大支援。

埋め尽くされてしまいそうな、多い、多すぎる人間。

その瞬間、俺の世界から全ての音が消失した気がした。日本全国の人々がここに集まっているんじゃないかとも思つた。

野球なんて、もうどうでもよくなつていた。

試合が終わり、駅へ向かう道にも、人があふれかえつっていた。そこでも再び俺は愕然とした。

「野球、すごかつたな。」

「え？」

「野球だよ、野球。どうだ、すごかつたろ？」

「ああ……。」

「どうした？元気ないな……」

「なあ、親父」

「ん？」

「あの球場……。どんくらいいた？」

「何が」

「人が」

「ううん……。満入りだから五万くらいじゃないか？」

「五万……。」

「どうしたんだ？」

「……。」

ここからは後日談になるが、家に帰つて、すぐに俺は部屋に閉じこ

もつた。そして机の中から埃をかぶつた電卓を引っ張り出した。日本的人口が一億数千というのは既に社会で習っていたので、震える指で『1000000000』と打ち、そしてそれを『50000』で割つた。

2000。

それを見て、俺はまた愕然とした。

2000分の1。

あんなにいた人間が、怖いくらいの大勢の人間が、この日本のたつたの2000分の1でしかないんだ。ほんの一部でしかないんだ。俺なんて、あの球場にいた人間の中の一人でしかなくて、あれだけたくさんに思えた人間も、日本の人口のほんの、ほんの一部でしかないのだ。

それまで、俺は自分が特別な存在だと思っていた。家族といふのも楽しかつたし、それに俺の通つていた学校には、いや、俺のクラスには世界のどこよりも面白い人間が集まつていると思っていた。でも、そうじゃないのだ。

俺が世界一楽しいと思っていたクラスの出来事も、俺の日常も、こんな日本の日本の学校のどこにでもあるありふれたものでしかないのだ。日本全国の人間から見たら、こんなの普通の出来事でしかない。そう気付いたとき、俺は急に俺の周りの世界が色あせたような気がした。俺の、どんなものよりも楽しいと思っていた日常は、どこにでもある、みんながみんなやつている普通の日常なんだと思うと、途端に何もかもがつまらなくなつた。

そして、こうも思った。

世の中にこれだけ人がいるんだつたら、その中には全く普通ではない、面白い人生を送つていてる人もいるんだ、そうに違いないと。

それが、俺じゃないのはなぜ？

小学校を卒業するまで、俺はずつとそんなことばかりを考え続けてきた。

……とまあこんな面白くもなんともない昔話を聞かせたのだが、よ

くぞ耐えてくれた。

しかし、中学に入学してから、俺は、そんなことはもう起こりえないと悟つて理解していた。

……そう。宇宙人、超能力者がいるような世界は、ないのだと悟ったのだ。

中学を卒業するには、物理原則が良くできていることに感心しつつ嘆きつつ、俺はいつしかUFOの特番や心霊番組、そういうた類をそう見なくなつていった。いるはずだ、という確信から、いるワケねー、けどいてくれたらいいな、という最大公約数的思考を持てるほどに俺も成長したのさ。

世の中の普通さにも、慣れてきた。

誰もが頭の片隅でそう考え、そして日常で埋まつていくように、俺もいつしか退屈な日常に埋め尽くされてしまつただろうか。

……なーんてな。

いまや高校生となつた俺は、キセキの邂逅を心のどこかで待ち望みつつも普通退屈な日常にいつしか慣れてしまつていった。こういうことなんだろうな。大人になるつてのは。だったら大人になんかなりたかねーけど、早く、バイクの免許は欲しいなー、とつい思つてしまつ、中途半端な俺の姿を嘲りつつ、大した感慨もなく俺は高校生になつた。

さて、空想はここまでにして、現実の世界に戻ろうか。

プロローグ（後書き）

## 第一章 始まりの話（前書き）

前回、間違えて第一章を更新してしまったので、調整を行つた  
に、……「めんなさい。

## 第一章 始まりの詩

そんなわけで、今、俺は体育館に押し込められている。何も俺一人ではなく、新入生全員がこの狭い体育館に押し込められている。要は、『入学式』なんつーイカレた儀式モドキをしているのだ。この体育館の人口密度はいかほどだろう、下手したらゴールデンウイーク真っ最中のどつかの空港に匹敵するのではないか、なんて考へていると、校長らしきおっさんが見事なまでに感情のこもつていない拍手を受けながら壇上に上がった。そして、催眠術師も真っ青な、睡眠を誘発かつ促進する超魔術的催眠音波をぼそぼそと、だが朗々と発し始めた。

今日が月曜ということもあり、俺は睡魔のヤローと必死の籠城戦を繰り広げながら、ここで空間を共にしている同士 同志、と言うべきか どもの顔を眺めていた。ここが普通の県立、偏差値45弱という貧弱高校である、ということもあってか、ちらほらと知り合いや元クラスメイトの顔が窺える。だが、知らん奴らも4割強ほどいるので、俺は変な目を向けられる前に粗探しを中止、数秒ほどボーッとしていたが、睡魔の強力なる波状攻撃に、抗戦むなしく俺の深層心理はついに全面降伏を決意、かくして俺はあっけなく睡魔の手によつて陥落した。

「おうあ？」

幸い、俺の奇声は拍手にかき消され、誰にも聞きとがめられることはなかつたようだ。

見れば、ヅラ校長が壇上から降りるところだつた。あの校長に一時感謝だ。睡眠波のことなんて忘れてやる。停戦協定、同盟締結といこうじゃないか。

この展開だと、次は校歌斎唱、といった感じだろう。俺はよだれをブレザーのすそでぬぐいながら、そのまま手を上げる。気分が優

れない、という意思表示だ。もちろん気分が優れないわけではなく、ましてや貧血などでもない。俺は先生の先導を受けながら、ちらほらと空いている同志の席を田の端で捉えながら、先生の愚痴を聞き流しながら、またか、と言いたげな軽い嘲りの視線を次から次へと放出する生徒の合間を縫うようにして退場する。

後ろから、校歌と思しきノイズが聞こえてきた。

ダルダルな入学式から一時的戦線離脱を試みた俺だが、さすがに授業までサボるわけには行かず、といつても数分で終わる軽い学活的なものをサボる氣にもなれず、俺は仕方なく入学式という名の呪縛から開放されなんとも晴れ晴れとして顔つきのやつらの行進列に混じり、いろんな人のふざけ半分批判的弁論を聞き流しつつ、一年六組、というのを確認してから俺は教室に入つた。新学年早々先生にお睨みをこじらむのはいやだからな。

「……。」

いや、本気でデジヤブを覚えたね。

窓から見える景色こそ微妙に違うが、机、黒板、蛍光灯、全てが数ヶ月前まで俺の安眠の場となっていた、俗称教室とほとんど変わつていなかつた。クーラーは付いていなかつた。中学にも付いてはいなかつたが、高校にもなればさすがに付いているだろうとう俺の読みは甘かつたようだ。

俺はこれ以上の間違い探しをあきらめ、席に着いた。

キーンコーンカーンコーン……

これまた聞き飽きたチャイムが鳴り響き、教室の扉の前で二タ二タしながら待つていたとしか思えないようなジャストタイミングで、颯爽と担任の教師が入ってきた。年齢不詳、がつしり体型、顔は四角く、無精髭が伺える。いわゆる『熱血体育教師』の顔つきだ。名前は知つたこっちゃねえや。ところで、無精髭は剃りなさい。

「よしつ！ ホームルーム始めるぞっ！！」

元気いっぱいな声が教室を満たし、まだ座っていない連中は慌て

て椅子取り合戦を始めた。

立っている人がゼロになるとほぼ同時に、彼は再び大喝を始めた。鏡の前で小一時間練習したかのような、にこやかな笑顔と共に。せめて第一印象くらいはよくしようって魂胆だろう。言つとくが、化けの皮つてのはセロハンテープべたべたの小学生的工芸並みに脆いんだぜ。そのことは俺がすでに実証済みだ。

彼は自分が体育教師であること、名前は榎原ということ、ハンドボール部の顧問をしていること、ハンドボール部は年々の部員不足に悩まされており、ハンドボール部に入れば即レギュラー間違いないこと、ハンドボールは何より楽しい！的なことをひとしきり言い終えると、もう話すことがなくなつたか、自己紹介をしようと言いはじめた。まあ、ありがちな展開なので俺もいくらかは考えてある。俺だって危険を事前に察知し、それを回避すべく行動するか弱き鳥並みの知能はあるのだ。

俺は此度8番目を仰せつかつたのだが、やはりどきどきしながら待つつてのはいくつになつても嫌なもんだ。

前の人気がつまらんギャグをほざき、教室の温度を存分に下げつつ、終に零下〇を突破、今にも凍りつくかと思われるような空気を背負つて、そのまま次の人にスルーパスをかますつてのが俺の双肩には重すぎる使命であるのだが、俺は何とか事前に決めといた台詞をかまづに言い終え、多大なる安堵と共に着席、かくして俺はスルーパスの使命を完全かつ完璧に果たし、次の人のついに来たか的な困惑的表情眺めつつ、俺は顔を伏せた。

まあ、そんな感じで、今日は過ぎていった。

## 第一章 夢

次の日。

俺は早くもサボリ魔といつ、かの天上天下無双の強さを誇る睡魔に匹敵する、強力な曲者に冒されはじめ、同体積の鋼鉄にも匹敵するかと思われるよう重い足を引きずり、睡魔の巣窟、その名も教室へ向かっていた。それでも学校へ行こうとする自分の健気さを褒め称えつつまた自嘲しつつ、俺は普段となら変わらぬ日常を送りうとしていた。変わっている事といえば、たかが生活の舞台が変わつただけだ。

そう自分に言い聞かせている自分を心の内へ押し込め、田の前に急速出現した扉 なんのこっちゃ をにらみつけた。

俺は覚悟を決め、教室の扉を、一歩躊躇してから勢いよく開けた。

「おお、ソーヤ、おはよーさん」

「おっす」

ちなみに、ソーヤといつのは俺のあだ名だ。なんてことはない、名前を普通に読んだらそうなるだけのことであるが、元より俺は名前で呼ばれたことはあまりなく、中学のときも『如月』で通っていた。それはそれで珍しい苗字だしな。だが、こいつ 黒川、だつたつか は蒼夜、という如月以上に漫画チックな名前が気に入つたらしく、ソーヤ、ソーヤと折りあるごとに喚き立てる。まあ、実際にそうだから仕方がないことなのだが、周囲もそれに呼応し、中学時代に一緒に、如月と呼んでくれた友たちも、ソーヤと呼ぶようになってしまった。

「どした？」

案の定、彼は人懐こい笑顔と共に、朱に交われば赤くなる、という言葉を思い出していた俺に話しかけてきた。

「ねみー」

「なんじゅ、そりやあ。眠気なんてよ、気合で吹つ飛ばしちまえー！」

神原の受け売りか。一回にして早くも聞き飽きた。あのハンドボール馬鹿は一言田には気合だからな。あまり熱血すぎても夏にはウザイし、かといって無氣力先生はただうつとうしだけだ。世の中何でもほどほどがいいのや。

それに、今の俺の気合は品薄プレニアお墨付きでな、めったにお田にかかるんだ。この俺が言うんだから、間違いない。

「なあに言ってんだ、俺の気合は年中無休この上なしだぜ！」

そう言って、彼はファイティングポーズを取り、ボクサー気取りのステップを軽快とはあまりにも言いがたいリズムで刻みだした。それはそれは、いくらか分けてもらいたいもんだな。毎朝俺は布団の中での睡魔の誘惑を断ち切るのに苦労しているもんではな。

「ならよお、朝ジョグしてみ？すっげー気持ち良いぜ？」

だから、俺は毎朝起きてるのに苦労してりつてんだろーが。

「そうだ、昨日の十時からのバラエティ見た？十一チャンの。」

ああ、そんなのあつたっけな。

「なんだ、見てねえのかよ、マジ面白かつたぜ？新コニッチーが参戦してきてよー、それがまた面白かつたんだ、今日もやるやじいから、見てみ、もう大爆笑間違いナシだぜ。なんつたっけな……」

「あ、俺も見た！『笑いのドロ沼』だろ！？」

なんて話に入ってきたのは、笹原という、こいつは俺と同じ東中出身の友達だ。おそらく秀才の部類に入るであろう笹原は、なんだかんだで黒川とも仲がよさ気な雰囲気になっていた。

「そうそうそれだ！お前も見たか、やっぱみないとダメだよな。」

何がダメなのだ。

「そりゃあ、もう人間としてだめだな。」

「ああ、確かに。あれは本気で面白いぞ、次元がちがうつつーの？なんかや、じつ……」

キーンローンカーンローン……

「おつと、じやな」

彼らの自慢話を回避させてくれたチャイムに感謝の念を送りつつ、

彼らの背中をのほほんと見つめ、彼らが席に着くと、ほぼ同タイミングで例の迅速振りを十分に見せ付けつつ、かの榎原氏が入ってきた。

「よしつ！ ホームルーム、始めるぞっ！」

新しい一日が始まる。名田上は、だが。

午前中はなんだかんだで勉強がなくて、あつという間に昼休みが到来した。

購買で買った菓子パンを食りながら、俺は外を見、縁の少なさに少ししみじみしながら、なんとなく黒川の弁当を見た。すげえカラフルだ。よくこんなもんを食える……

「お？ そんなにえび入りシューマイが珍しいか？」

田代とくも気付かれた。

「それにしても、縁、少ねえよなあ。」

俺の実に見事なスルーに気を悪くした様子もなく、彼は俺の話に食いついてきた。

「ああ、こじらも俺らが生まれる前までは縁豊かだったんだろうなあ」

「なんだ、その俺らが悪い的な言い方は」

「そういうつもりはなかつたんだが、……地球温暖化、恐るべしだよなあ。」

「環境破壊だろ」

「どつちでも変わんねーよ」

「アホか」

そんな他愛のない話を繰り広げているうちに、昼休みは終わった。んでもって、五時間目。

先ほども申し上げたとおり、一、二時間目は学級活動でつぶれ、三、四時間目は体育ということで勉強がなく、五時間目が実質今日はじめての授業となるのだが、初めての授業としては申し分がありすぎる数学ということで、俺の深層心理は睡魔軍に攻め立てられる前か

らすでに降伏論派に傾いていた。

しかし、やつぱはじめての授業なんだし、張り切つてやつてみないか、という抗戦派も少数ながらあり、というわけで頑張つて数分ばかり睡魔と籠城戦Ｖ２　いや、この場合Ｌ２か　を繰り広げていたのだが、その辺はやはり、と言つかさすがは睡魔、彼らは軽々と張りぼての城壁を乗り越え、抗戦派を叩きのめすと、難なく俺の深層心理城を陥落させてしまった。おお、恐るべし、睡魔。天上の韓信もナポレオンも真っ青だ。

誇張も交えて言えばこうなるのだが、その戦いの最中、俺の中に少しずつ増え続け、現在進行形で増加し続ける絶望も、忘れないでいただきたい。どういうことかって？まあ、そのうち、お前にも分かる日が来るさ。

俺だつて、頑張つたんだからな。誰かも言つてたろ、頑張つて頑張つて、それでもだめなら仕方がない、と。

まあ、とゆーわけで、数学の先生。必死こいて授業してゐるあんたにや悪いが、俺もそろそろ限界っぽいんだ。おやすみなさい。

一面に広がる。

ここは、どこだろう。

草花がそよぐ。

いつか見たかのような既視感。

だが、雰囲気が　何か違う。

風になびく草も。  
さえずる小鳥も。  
そんな気がする。

体が…動か…ない？

手も…足も…口も？

世界が暗く…

.....

.....

キーンゴー→カーンゴー→.....

俺の安眠は、終戦を告げる鐘の音の元にぶち壊された。睡魔が退散してゆく。

「では、今日までだ。家に帰つたら、この門をやつ直しておくよ。」

やう言つて彼はとつと退室してしまつた。

「.....うむ」

顔がいてえ。顔を上げると、こちらを見ていた黒川がふきだした。おそらく、教科書の痕が顔についているのだろう。教科書出していただけエライと思えよ。お前なんて教科書さえ出てねーじやんか。しまつた、なんてことはあるまい。.....誰だ?今五十歩五歩とか言つた馬鹿は。

まあ、これで試練いや、安眠かは終わり、家へと凱旋敗走か?をすることができるのだが、俺の中の絶望はいつそう大きくなつていた。

そういうば、なんか変な夢を見た気がするが、それこそどーでもいいや。

俺は自分の部屋に入り、フローリングの床に荷物を投げつけると、ベッドにのしかかった。

ちくしょう、高校になつたら少しくらい面白いことあつかな、と一縷の望みをかけていたのだが、あつけなくもずたぼろになつてしまつた。

中学のときと、何も変わっちゃいねえ。

……だが、俺のそんな深層心理とは裏腹に、意外と時つづーもんは早く過ぎ去つてくれることだろう。

大して変わりやしねえだらう。どうせ、毎日、同じような、退屈な日々の繰り返しぞ。毎日、毎日。多少は変化があるかも知れねえが、大きな違いは皆無だらう。

そう、宇宙人が襲撃してきたり、机の引き出しから青い不良品タヌキが出てくることもなく、ましてや世界存亡の危機が訪れたりもしていない。

全く、退屈だよな。そう思わないか？

俺は如月蒼夜。普通の、普通すぎる高校生だ。その普通さが今日の結果を招いているのだが、蒼夜つていう珍しい名前は親父が好きな漫画の主人公から取つてきた名前らしい。その主人公がまたすごくてよ、一飛びでビルを飛び越えたり、指先からビームを出したり、新幹線より早く走つたり、上から迫る（横だったかな？）プレス機を受け止めてひん曲げたり、するわけよ。まあ、当然俺には一飛びでビルを飛び越えたり（以下略）などできないが、それができたらどんだけいいか。それこそ、俺が中坊の頃より強く望んでいた、退屈な世界からの脱出、面白い世界との邂逅であるのだから。

だが、俺が何億年先になるか想像をめぐらせていたキセキの邂逅は、意外と近くにあつたのだ。灯台下暗しってやつさ。

邂逅は、この時から、いや、もう少し前から既に始まつていたの

だ

といつても、このときの俺はそんな事を知っているわけがなく、いつも通りに床についただけだ。

一面に広がる草原。

ここは、どこだろう。

草花が、風にそよぐ。

いつか見たかのような、そんな既視感。だが、霧囲気、というか 何かが違う。風になびく、青々とした草も。木々の上でさえずる小鳥も。

この世のものではない。

そんな気がする。

誰か……立っている。

草原の真ん中。

大きな木の下。

世界が暗く……。

「お？」

目が覚めた。

しかし、俺が寝ていた場所はベッドの上ではなかった。

どうやら座つていいようだった。

勉強机？俺の部屋にある？

まさか、どつかの受験生じゃあるまいし、しかもよりによつてこの俺が勉強をしまくつて、そして力尽きて倒れる、なんて超不健康的（もちろんいい訳である）なことが出来るものか。俺は昨日、き

ちんとベッドで寝たはずだ。

「おお、尻がいてえ。

顔を上げると、そこには、母でも、親父でもない、けれど見慣れた顔があった。

「おはよーさん、よく眠れたか?」

「そう言って、俺の肩をたたく。」

笠原。

中学時代からのクラスメイト。

俺の部屋に来たことはあるが、合鍵を渡した覚えはないし、一日の初めにこんな奴の顔を見て、とかく視界に入れてしまつたら最後、その日は天地開闢以来史上最悪の一日前になるであらうこと間違があるまい。

なぜここにいる。

「どうした?」

俺の部屋に。

そういうわけで、すぐさま前言撤回。そんな突拍子もないことを言つのもどうだろ? そんな俺の超完璧な理性のなせる業だ。

「じい……じい?」

「は?」

彼は一瞬、戸惑つたような顔をしたが、すぐに元に戻り、いつも言った。

「じいは教室以外のどこでもねえよ。馬鹿か?」

「教室……?」

なぜだ。

いや、つーかむしろ制服で寝るはずがないだろ?。

そう、俺は制服を着て、学校にいたのだ。

何でだ?

「寝ぼけてんじゃねーよ。どあほ。」

そうか、おれはもしかしたら今朝学校に来て、そして寝てしまつたのかもしれない。

しかし、その間の記憶がないのはなぜ？

キーンゴーンカーンゴーン……

「おひ、じゃな」

まあ、そういうこともあるのだね？

俺がここにいるからには、やっぱ、今朝俺は学校に来たんだろ？  
俺はそう判断し、颯爽と入ってきた榎原に手を留める。

「よしつ！ ホームルーム、始めるぞ！」

髭は剃れつて言つたのに。言つてねえけど。

このとき、俺はまた退屈な生活をおくらなきやいけねえのか、と内心ため息を吐いていたのだが、誰かにそれを悟らせるようなへマはせずに、ただぼんやりと先生の話を聞き流し、いつの間にか昼休み。おにぎり片手に、俺はなんとなく校庭を見やつた。桜が咲き乱れ、道が桜色に染まつてゐる。そもそも毛虫たちが奇襲を仕掛けてくる頃合だ。やっぱいつになつても毛虫は苦手だん？

そして俺は気付く

立ち並ぶ家やコンビニ。あらぬ見える、自動販売機。これらはいつも通り、小学生の頃から見慣れた景色だ。だが。  
ひとつだけ。

今まで見たことがないような山が、街中にビーンといふ効果音と共に立つていた。

そう。まったく見覚えがない。

なぜ山があんなところに？

いや、やっぱそこにあるんだから、前からあつたんだろう？  
だが、俺が十五年間無為的に過ごしてきた町で、しかもあんなにでっかい山を見落とすはずが

「どした？」

笛原だ。どうか、他人に聞いてみればいいのか。

頭をクールダウンさせながら俺は言つ。

「あのさ、あそこにある山、あるだろ？」「

そういうて、さっきの山を指差す。

「ああ、あれがどうした?」

「あんなのあつたっけか?」

「お前はいつも一言足りねーよ

親父にもよく言われる。

「だからよ、前からこの町にあんな山なんてあつたっけか?」

彼は、は?と言いたげな表情になりつつも、こう答えてくれた。

「たりめーだろ、じやあ何であんなとこに山があるんだよ。」

微笑しながら彼は言つ。

「だよな……。」

おれも微笑する。どちらかといえば、苦笑に近かつたが。

しかし、俺の気持ちは晴れなかつた。

「ふうっ」

そう言つて、俺はベッドにエルボースマッシュの要領で倒れこんだ。だが気分は暗澹たるものだった。俺は生まれてからずっとこの町に住んでいた。よく行つてた駄菓子屋なら、目をつぶつても行けると思う。車にひかれさえしなければ、だが。それなのに、見覚えのない、しかし前からあつたかのような雰囲気を持つ山が……やつぱ、前からあつたのかな。

だけどあんな山……というより、俺はあまり山を見たことがない。お盆に、田舎のばーちゃんちに行くときにだけ持める、特別なモノ。それが、俺にとつての『山』だったはずだ。

つーか、昨日、緑の少なさを黒川としみじみしたじゃないか。なんか、おかしい。ここは俺の部屋。それこそ変わりようもない事実であるが、なんか違つような そつ感じずにはいられないのだ。ふと、前触れ、という言葉が脳裏をよぎった。

「まさか……な。」

誰に言つたのだろうか。そういうつて、俺は目を閉じた。 笹原・黒川連合軍の言つてたバラエティは諦めよう。 そろそろ睡魔の野郎が俺のまぶたの上でウロウロしている頃合だ。

偶然や。

一面に広がる草原。

まだだ。最近、俺が眠ると、いつもいつもだ。  
なんなんだよ。

だが、昨日のと比べると、だいぶ風景がはつきりして見える。  
青空の下に、桜吹雪が舞う。木々が桃色の中、一つだけ深緑の木

があり、妙に印象的だ。

……その木の下に、人が立っている。…女だ。長い黒髪を風に遊ばせているが、俺とそんなに年は変わらないだろう。少女、と言つたほうが正しいのかもしれない。

……昨日に比べて、風景がはつきりしているだけじゃない。意識も、だいぶはつきりしている。おかげで、いくらかは余裕が出てきた。

そして、一つだけわかつたことがある。なんてことはねえ、ここは、ガキの頃よく来ていた国立公園だ。縁が豊かで、敷地が広いことで有名らしいが、詳しくは知らん。

だが、何で俺がそんな夢を見なきやならねーんだ?…ここで悪いこともしてねーし、特に思い出に残るようなことをした覚えがない。一つだけ覚えていることといえば、かくれんぼをしていて、そして変な、なんとも形容しがたい、青いクリスタル状のものを見つけ、地面に埋めたことがある。ビーセ安物のプラかなんかだろ、と思い、特に気にも留めずにかくれんぼを続行した、そんだけさ。

……!

少女が、こっちを向いた。比較的整った顔立ちだったが、表情は硬い。

……なにか口をパクパクし始めた。ふざけているのか、何か伝えようとしているのだろうか。

……どうやら後者が正しいようだ。声が聞こえてきた。凜とした声だったが、よく聞き取れない。

「……異変が…おこ…あなた…ここに…き…」

何を言っている。もつとハツキリ喋つてみたらどうだ。

……世界が暗くなってきた。畜生、もつとここにいさせろ、なんて言つてんだ、彼女は。

意識が遠のく中、ハツキリと、聞き取れた言葉があつた。これだけは、妙にハツキリと。

「ここに…来て…下さ…い…」

.....

「一」

朝日が田にしめる。

朝、か。

今日はベッドの上にいた。

昨日の夢……。なんだつたんだらつ。はじめてみたはずなんだが、何度か見たかのような気がする。

それも、驚くほどよく覚えていない。

確かに、変な草原的なところに少女が……

いや、ずいぶん漫画チックな表現だが、確かにそんなどつた気がしないでもない。

ただ、彼女がなんて言っていたのかは思い出せない。

つーかむしろほんとには人がいたのかも怪しい。

まあ、大したことあるわきやねーだろ。所詮夢さ。

俺がその回答に行き着いた、まさにその瞬間、俺はちらりと時計を目の端に捉えた。

八時。

「やべええっ！…」

俺はベッドから跳ね上がる。パジャマを脱ぎながら、ほぼ同時進行で制服を着るという妙技を見せ付け、誰にだ?といつまらん突つ込みは軽やかに無視、実際に着替え主要時間30秒と言つ最速記録を打ち立てた自分に惜しみない拍手を心の中で送りつつ、カバンをもぎ取り、俺は家を出た。

まあ、慌しき朝のおかげで夢のことは綺麗さっぱりとテリートすることに成功したわけであるのだが、さて、果たしてそれは幸か不幸か?これがわかるのは、もう少し後になつてからだ。

.....

まあ、そんなわけで猛ダッシュの甲斐あつてギリギリ校門がしま

る「ン」マー一秒前に学校にたどり着くことができたのであるが、まだ学活までは時間があり、こうして悠々と廊下を歩いているわけだ。扉を開けると同時に飛んでくる野次にどんな反応を示そうか考へているといつの間にか俺は教室の扉の前に立っていた。光陰矢の「」としどは、よく言つたものだ。ちょっと大げさか。

思考がまとまらぬまま入らなければいけないのはまことに遺憾の限りではあるが、榎原に見つかっては色々とめんどくさいので、仕方なく俺は扉を開ける。

しかし、俺がそこで見たのは全く予想に反していた景色だった。というか、予想さえしていなかつた、する必要がないくらい当たり前のことが、当たり前ではなかつた。

「……。」

「……。」

嫌な沈黙。みんなの視線が全て俺に集中。すぐさま回れ右。教室を出る。

そこに待つていたのは、全く見知らぬ教室、そう、俺は教室を間違えたのだ。

が、俺は教室の標識を見て、さらに驚愕することになる。

「一年……六組？」

そう、そこは紛れもない俺の教室だったのだ。

扉の窓から中を盗み見るが、そこにいるのは榎原や石塚じゃない。全く見知らぬ生徒、もしくはクラスが分かれてしまった元クラスメイトの友人、といった具合だ。

どうなつてているんだ。

ただ、俺が間違えているだけなのだろうか。いや、そんなはずはない。今まで といつても三日だが、ずっと六組に行つていたのだ。生徒手帳を見てみると、そこにはやはり六組と

「あ？」

書かれていた。そこには『七組』と明記されていた。

「？」

俺は首をかしげながら仕方なく七組へ向かつ。どうなつているんだ。

七組の扉を恐る恐る開けてみたが、そこはやはり俺の教室なのだろつ、笹原の姿が見えた。しかし、黒川の姿はなかつた。

「おっ、ソーヤ。遅いじゃん。」

しかし、答える気にはなれなかつた。

「……どした？」

「黒川はどうだ。」

「黒川？」

ただならぬ雰囲気を感じ取つたのか、彼は一瞬真顔に、しかしそうにいつもの柔軟な顔に戻つた。

「黒川って、誰？」

「……！」

「マジかよ……」

「ほら、昨日一緒に話したじゃんか、あの……」

「ソーヤ」

彼はスッと目を細くし、どこか哀れむかのような眼差しを俺に向けた。

「俺は昨日…風邪で休んだぞ？」

え？

「だから、俺がお前と話しようがねーんだよ。」

え？

「最近、おかしーぞ、ソーヤ。大丈夫か？」

頭の芯が、カツと熱くなるのを感じた。

「いくらなんでも、こりやあねえだろつ……

フランチ、と、目の前が暗くなるのを感じた。

「ソーヤ！？」

多大な衝撃と共に、それが、最後に聞いた言葉だつた。

## 第四章 困惑（後書き）

更新……と。さて、物語は急展開です。ソーヤ君はどうなつてしまつたのでしょうか？（拍手）

## 第五章 果報

暗闇。

そうとしか、認識できなかつた。

何もない。何もない、暗黒の世界。

まさか、俺、死んだんじゃねえだろうな。

ふざけんなよ。まだ、やり残したことがたくさんあるんだよ。新作のゲームもまだやつてねーし、好きな漫画も途中までしか読んでねえ。

……なんてくだらない事を考える俺に喝を入れていると、

「…き…さ…」

声が聞こえた。良かつた、俺は生きている。生きては、いる。

「如月！」

「はいはい、わかりましたよ。

仕方ねえ。目覚めてやるか。

しぶしぶ、だが恐る恐る目を開けていく。もし俺が異世界なんかにいたら笑つてやる。

「…。」

笑わずにすんだようだ。

ここは…保健室だ。入学式の際に一度来たから覚えている。ベッドを囲み、榎原と教頭 最近は副校長とか言つらいいな の顔が見えた。どーセならもつといーもんを見たかった、という本音はしまつておくことにし、とりあえず俺は状況の把握に努めた。

「……大丈夫か？」

ぎりぎりアウト、といった所です。

そう言おうとしたのだが、頭に痛みが走った。

「痛ッ…」

「大丈夫か？」

同じ台詞を繰り返し、心配そうに俺の顔を覗き込む。

「ただの貧血だらうが、倒れた時に頭を打つたらしいな。朝飯、食つてきたか？」

力なく首を振る。

「そうか、朝飯はきつちりと食わんとダメだぞ。……授業、出れそ  
うか？」

帰りたい。

「… そうか、親、家にいるか？」

恐らく働きに出てるだろう。

「そうか、じゃあ俺が家まで送つていいでやるから、準備できたら  
校門まで来てくれ。……カバンはそこにある。」

大丈夫です。つーかむしろ来ないで下さい。今の俺に必要なのは、  
温もりでも、慰めでもなく、一人で考える時間なのですから。  
……とは言わずに、コクリ、と首肯するだけにしどぐ。まだ死にた  
かないとからな。

「じゃ、気をつけて、急ぐ必要はないからな。」

そう言って、彼は教頭 副校長と共に出て行つた。残つたのは保  
険の先生だけだ。九時、五分。今日の一時限目は体育だつたはずだ。  
……少し、嬉しかつたが、それもつかの間、俺はすぐ現実に引き  
戻された。

「……どうなつてんだ。」

「……え？」

おつと、保険の先生に聞きとがめられたようだ。

「いえ、なんでもないっす。」

「そう、早く行きなさいよ、あ、でも無理はしないでね。」

「うひっす」

適当に返事をして、俺はカバンを引つつかみ、廊下へ出、そのまま  
校門へ向かう。正直言つて、早退するほどでもなかつたが、俺の  
第六勘が帰れ、帰れとわめいている。

「……やつぱりな。」

.....

そつづぶやいて、俺はベッドにのしかかる。ほぼ日課となりつつあるが、手に持っているのは、いつもと違う。クラスの名簿だ。入学式で貰った気がする。

俺のクラスの席順は、確かに出席番号順だつたはずだ、だからこそ俺は黒川の前の席になり、そして知り合つたんだからな。

座席表を指差しながら名前を確認していく。

新井、池田、鶴澤、江島、大澤、河崎、川口、如月。俺だな。で、次は笹原。

黒川がない。

一年全員を当たつてみたが、これはクラス分け名簿で確認 黒川、という苗字の人はいなかつた。恐らく、学校中探しても、『黒川』はいなだらう。

ついでに言つておくと、学校から出る前に、榎原に聞いてみたところ、本当に昨日、笹原は休んでいた。

これで、確信が持てた。

あの山は、前からあつたものじやない。作られたものなのだ。それも、人の手によつてではない。さらに、他の人の記憶を操作し、あたかも前からあつたかのようにさせている。

常識に対する矛盾。

山の出現。

黒川の消失。

記憶の操作。

ついでに、昨日の、朝の俺のことも含まれる気がする。

……世界が、おかしい。

俺の頭がおかしい？いや、それはあるまい。むしろ、俺の頭がかしい方がよっぽどいいぜ。それなら俺が精神科に叩き込まれりやいいだけだからな。

でも、自体はおそらく、そつ樂觀できるよつた中途半端なものではない。

この事態を否定するにはさすがるほどの伏線を味わってしまった、

この俺にとつて。

俺の第六勘は、間違つてはいなかつたのだろうか。

だとしたら、どうすりやいいんだ。

「……わけわからねえよ……。」

俺に、何かしろつてか。

何をすりやいいんだ。

つーか、まず俺はどうすりやいいんだ。

普通に暮らせつてか。ふざけるな。

人は、当てにならない。

記録なんて、もつてのほかだ。

どこかに行くのか。

どこに。

なぜ。

頭が悲鳴を上げる2秒前に、俺は、ふと夢のことを思い出した。  
朝の時は思い出せなかつたのに、今になって、まるでついさっき  
のことのように、鮮明に思い出した。

俺が味わつた伏線の一つ。

一面の草原。

風にそよぐ木々。

そこにいた少女。

俺に、『ここに来てください』、そう言つた少女。

俺が、そこに行くべきなのだろうか。

俺がよく遊んでいた、あの公園に行かなくてはならないのだろう  
か。

「めんどくせえ……。」

そう言つて、じりりと寝返りを打つ。

所詮、夢さ。

そう結論を下し、だが、俺の頭の上に一つ、大きなクエスチョンマークが浮かんだ。躊躇なくダブルクリック。ああ、だから俺はネット詐欺には気をつけるようよく言われるんだな。

そして、俺の頭はこんなことを表示した。

もしそこに行つたら、世界が元通りになるのだろうか。

おかしいのは俺の頭か、出来ればそうであつて欲しいが それとも世界かはわからんが。

だとしたら……行くしか、あるまい。

「……行つてみるか」

そう言つて、俺は立ち上がる。果報は、寝ていては来ないのだ。その果報が、果たして甘いものか、渋いのか、青酸カリ入りかはまだ未知数だが。

……少なくとも、甘いはずはあるまい。

俺はため息を一つ吐いた、しかし、そのため息に込められた気持ちは、めんどくせえ、でもなくて恐怖でもなかつた。さて、なんだろうね。

## 第六章 邂逅

ママチャリで飛ばすこと数分、そろそろスピードを落とすかと考え始めた頃合を見計らつたが、実に絶妙なタイミングで、ピンクで彩られた木々が見えてきた。

「……ここか」

そう、ここなのだ。ここ以外にありえない。そんな気がする。

俺は『自転車乗り入れ禁止』の看板を軽やかに無視し、公園にそのまま突撃、管理人の苦虫を噛み潰したような顔を横目で捉えつつ、少し誇らしげな気持ちを味わい、そして急いで『そこ』へ向かつた。

自然と顔がほころんできたのは、気のせいだろうか。

『そこ』にはすぐにたどり着いた。俺の方向感覚も捨てたもんじゃない、迷うことはなかつた。

「……。」

桜吹雪が舞う、青空の下。

一つだけ、深緑の木があり、その下に。

いた。

長い黒髪をなびかせ、俺に背を向けている。あの人で、間違いないだろう。

自転車から降り、徒步で近づいて行く。

「遅くなつて悪いな。」

もうちょっと、一寧に言つべきだったのかもしれない。が、彼女はゆっくりとこちらを振り向き、そして静かに微笑んだ。

「来てくれると、信じていました。」

彼女の、見た目に会わぬやけに涼やかで、そして静かな口調は、俺の気分を落ち着けるに足るシロモノだった。今の俺の気分を落ち着けるなんて、そうそう出来ることではない。

「ああ、俺の夢に出てきた人、あんただろ?」

突拍子過ぎた。

「ええ。失礼ながら、あなたの夢を利用して、メッセージを送らせてもらいました。」

むむ、敬語を使われることが、こんなに居心地の悪いもんだと私は思いましたが、中学のときも、後輩方はタメだつたしな。

「で、何でここだったんだ？」

「どういづいとですか？」

「だから、何であなたは俺をここへ呼び寄せたんだ？」

「あなたが聞きたいのは、そんなことではないはずですよ？」

「うつ……。」

静かな口調だが、十分に鋭い言葉だった。確かに、この言葉は俺の『逃げ』であつたのかもしれない。

分かった、单刀直入に行こうじやないか。

「どうなつてんだ？ 何か、知つてるんだろ？」

そうでなくては、困るんだ。

しかし、彼女は我が意を得たりとばかりに頷いた。  
「そう、それです。それを伝えるために、私は、ここへ来たのですから 率直に言います。いらない誇張や修飾はなしで、です。」

一瞬の沈黙。風の音が、やけに高く響いた。

「つすうす感じしているかもしれません、そうです、ここはあなたがもといた、あの世界ではありません。」

やつぱりな。

彼女の言つとおり、つすうす感じこはいたので、驚きは少なかつた。

「じゃあ、ここはどこなんだ？」

「パラレルワールド、といづ言葉を知つていますか？」

知つてるけど。

「ここが、そつだつて言つのか？」

「正確に言つと違つりますし、『躊躇空間』といづ表現もあるのですが……まあ、現時点においてのこの状況をより正確に表すことが出来る情報単語はそれが最も近いでしょ。」

「どうこう」とだ?「

「それは……言えません。禁則事項です。」

「は?」

禁則…事項?

「読んで字の「」とく、現時点で私が言つてはいけない言葉です。」

「現時点とは?」

「いえ、気にしないでください。」

そんなこと言われても、人間の 特に俺の 知的好奇心は無限大なんだぜ。

「じゃあ、今何が起こうっている?」

「起こうた、といつたほうが正しいでしょう。」

「どうでもいいから。」

「これはすみません、では説明しますが、その前に。」

そう言つて、彼女は宙に手を伸ばし、何かを取るよくな動作をした。

「これを見て下さー。」

そう言つて、彼女は手を出してきた。桜が数枚入っていた。

「これが、何か?」

「どうして、ここにこれが存在すると思いますか?」

「どうして、とはなぜ、という意味ですか、それともどこのよつて、  
とこつ意味ですか。」

「なぜ、の方で。説明できますか?」

「マジかよ。どのよつて、なら食物連鎖を使ってまだいくらか考えられたの?」

「そりゃあ、ここにあるべくしてあるんだらつ……」

「答えになつてません」

「悪かったな。どうせ俺は赤点ストレスレ超低空飛行常習犯だよ。」

「まあ、この時の論理基盤は私たちの論理基盤とは全く違うので、仕方ないことですが。」

今疑問を抱かれた皆様を代表して、俺が聞いてやるつ。論理基盤と

は？

「あなた方が『いつ』の、『物理原則』や『常識』って言ひやつ  
です。」

ふむ、この世界を限りなく退屈なものにしていく要因が揃いも揃つて。

「退屈、ですか。それは、あまりにも普通すぎる世界に対する、と受け取つて支障はありませんね？」

支障はありません。

「ならば、話は簡単です。今あなたなら、そんな『常識』を捨てられましょう？」

自信値は85%、と言つた所か。

「それだけでも十分です。では、話しますか。」

俺に言われても。

「ここに桜があるのは、いえ、桜に限らず、全てのものがこの世に存在しているのは、ここモノが存在している、という情報があるからです。」

は？

「つまり、ここに私がいるのは、この時空に、私という個体が存在しているという情報があるからこそ、私はここにいるのです。情報無くしての物の存在はありえなく、また物質がないのに情報だけは存在することも……一般にはありえない、そういうことです。この散る桜も、複雑な情報の組み合わせによって、今、ここに、これこれこういうものが存在している、という情報があつてこそ存在するのです。死ぬ、というのはこの世に組み込まれていた情報が消滅することで、生まれる、というのはこの世に新たな情報が組み込まれた、ということです。……分かりましたか？」

田と口で三つの点を作つた俺が心配になつたか、彼女はそんなことを言つた。

「……まあ。」

要は、モノは全て情報によって存在してゐて説だろ。……ん？

「情報の組み合せって、今あなたは言つたよな？」

「ええ。」

「その組み合せ、つてのはどういうものか分かっているのか？」  
「まだ解明されていないものもありますが、この世に存在している物質の99・9%は既に解明されています。

残りの0・1%が何なのか気になつて仕方がなかつたが、それはおいといて。

「その情報を原子みたいに組み合せを変更したりできるか？」

「どういう意味ですか？」

「要は、その『情報』つてのは、人によつて操作できるのか？」

「……ええ。」

「あなたもできるのか？」

「情報操作法で許されている限りなら。」

「情報操作法？」

「情報操作が自由に出来ると、人の存在を消したり、武器を出した  
り、人の記憶を操作することも出来てしましますから。」

「なるほど。」

俺は少し考えてから言つた。

「じゃ、なにか出してみてくれないか。いまいちあなたの言つこと  
が納得、且つ信用できねえ。それが出来たら、信じられるから、さ。

「分かりました。何がいいですか？」

「金」

つい口から出てしまつた言葉がこれで、なんとも恥ずべき次第だ  
が、彼女はゆっくり否定した。

「それは、操作法に違反しますね。」

「そうか」

安堵と無念の混じつたため息を吐く。

ぐう

「……。」

腹が鳴った。そういうや、朝飯食つてなかつたしな。

本来ならば恥ずかしく思つべきところなのだろうが、不思議と恥ずかしくはなく、そして彼女は微笑みながら言つた。

「……じゃあ、リンゴを出しましようか。」

そういうこと、彼女はなにやら囁え始めた。回復呪文では無むれつだ。

「終わりました。」

「終わつたつて、ピーピー?」

リンゴは?

「あなたの後ろの、自転車のか」を見てみてください。」

「お。」

「あつた。真つ赤で、うまいそうだ。」

「これ、食える?」

「どうぞ。」

「じゃあ……」

そういう言つが早いかすぐさまリンゴをかじる。普通のリンゴと変わらないどこの話ぢゃない。やっぱ、美味すぎるわ。空腹にはたまらないね。

「わお」

「おいしいですか?」

「最高」

「良かつた」

これから先、ずっとこれ以下のリンゴを食わねばいけない、と思うと少し気が沈んだが、彼女は俺が食い終わるのを待ち、『丁寧にナフキンまでくれた。

「これは、普通にもつていたものです。」

なんだ。

なんて、のんきにリンゴを食つている場合ではないと思つ。

しかし、何でだろ? この人の近くにいると、体中の焦燥が全て安堵とか、そう言つた類に変わっていくような感じがする。今なら

青いポンコツ狸が突然ピンク色のドアから出てきても対応できやうだ。

「さて」

俺がナップキンで口を拭き終わると同時に彼女は唇を割つた。

「話を戻しましょう。私たちは、定められた範囲でなく、この通り彼女はそこでいったん口を切ると、俺のナップキンを手に握り締め消した。

「おお」

彼女は満足そうに続けた。

「この通り、情報操作によつて情報を消去、もしくは創造できます。

「俺が……出来るわけ、ないよなあ。

「いえ、出来ますよ？」

「なに?」

「どうやつてだ、教える、頼む、早く、教えてくれ。

「ただ、今のあなたが持つている概念のままで出来ません。」

「なんとなくだが、要是今のままで出来ないってか。

「ええ。そもそも情報操作、といつのは特別な概念の上に立脚しているさまざまなものにつとてそんざいしています。ですからそのためには、私たちの持つている概念を全て理解、信仰してもらわないと。……まさか万物情報理論も、平面空間基礎方程式も、まだ無い……ですよね。」

いかなる意味にございましょうか。

「なら、いいです。第一に、これらを習得し、情報操作に至るまではかなりの時を要しますので。」

「ううむ……。」

「気を落とさないでください。あなたの望んでいた、『非日常との邂逅』は、すでに始まっているのですから……。」「どういう意味だ?」

「この街が、すでに情報操作によつて時空改変がされた、という話

は……」

時空改変？

「まだ、していませんでしたね。」

ヤバイ、ようやく、ノート取つた方がいいのかもしない、という気持ちになつてきた。

彼女は微笑をさらに濃くし、続けた。

「ふふ。その必要はありません。……時空改変というのは、そのままでですが、時空の改変が何かの手によつて施された、ということです。」

えつと、つまり？

「つまり、私たちでもなく、あなた方でもない、第三者が情報操作を行い、この世界、いや、この時空を改変して、」

待て待て待て待て待て。

「さつき、情報……」

ええと。

「操作法です。」

それだ。

「規制されていないのか？」

「空間の改変を、ですか。」

ああ。

「鋭いです、その通り。本来ならば規制されていたのですが、その者は、情報操作法に規制されていない者なのか、それとも法の抜け穴を巧みに潜り抜けた人なのか、分かりません。……しかし、もしもその人が拘束解除プログラムを使えたとしたら、これはまた話は別です。」

拘束解除プログラム？まあこれくらいはさすがの俺でも察しはつくさ。要は法による制限を緩和するつてんだろう？

「ええ、そういうことです。」

「あんたも、拘束解除プログラムとか使えるのか？」

「申請が要りますが、一応は。」

質問ばかりで申し訳ないが、申請って何だよ、何を哪儿で申請するんだよ。

「だから、拘束解除プログラムの使用許可を得るためには、そういうものを司つている情報管理センターに、その目的と期間、詳しい状況を申請し、そして許可が下りられねばなりません。が、許可さえあれば情報操作法の大部分が無効となり、あらゆることが出来るようになります。」

めんどくせえな。

「まあ、これも仕方の無いことです。……また話が逸れてしまいましてね。」

正直なところ、俺は少しイラついていた。

状況も、53%くらいは把握できた。

なんだかとてつもないくらいアホなことが起こっている、ってことだろう。

だが、あんたは一つくらい大切なことを言つて忘れているや。それは俺だ。

なぜ俺がここにいるか 情報、とかそう意味じゃなくて、だ。何のために、俺はここにいるんだ。

特に意味が無いわけが無い。

要は、世界がおかしくなつちまつたんだりつ?

俺だけを、取り残して。

なぜ俺でないといけないのか、それは置いといてやる。そんなことは、どうでもいい。今は、だが。

今、俺が知りたいのは

俺が、この世界で、何をしなくてはいけないのか。

それだけだ。

情報が何だとか、方程式があーだとかはビリでもいいんだ。

そして、この世界が、果たして俺の

「あなたがこの世界でしなくてはならないこと。それは、まず、このようなものを探して持ってきてください。」

そう言つて彼女は、ポケットからメモリーのようなものを取り出した。

「それは？」

「これは、記憶媒体という、特殊な…メモリーみたいなものです。」

「メモリー？」

「はい。これを人の情報の中に組み込むと、そのメモリーに記録された記憶が蘇り、その人が使えたものが使えるようになったり、自分でが使えるものが使えなくなったり

「で、その記憶媒体とやらには誰の記憶が入っているんだ？」

「禁則事項です。」

「マジかよ。」

「それを、俺がつけるのか？」

「つけるといふか……この情報の中から、一部の情報のみを摘出し、その情報をあなたの中に注入します。」

「その一部というのは？」

「情報操作にまつわることです。」

「！」

「じ…じゃあ、もしかして……」

「ゴクリ、と彼女は頷いた。

「マジかよ……。」

「マジです。」

そう言つて、彼女はパーフェクトなワインクをくれた。

## 第六章 邂逅（後書き）

さて、ここがいわゆる起承転結における『転』です。この小説は異様に『転』が長すぎる気がするんですがそれはおいといて、ところどころ意味不明な単語が転がっていますが、それは、なんとなく小難しいイメージが伝わればそれでいいかな、程度のものであり、また伏線もあるのでそんな気にしてください。

あ、感想、お願いします。

## 第七章 思考

そんなわけで、今俺は家中、俺の部屋、ベッドの上だ。ここここ  
ると思考力が3割増しになる気がする。まあ、元値が少ないから大  
した数じゃないのだが。

こんな状況なのに、宝探しをせよ、というあまりにつまらなく、  
そして命令口調な依頼を受注してしまったのだが、見返りとして攻  
撃呪文（どちらかというと補助呪文の方が正しい気がする）を習得  
できるらしいので、まあいかと自分に言い聞かせつつ、俺は彼女  
との会話を思い返していた。

『これは、この街の、どこかにあります。』

どこかつて。

『この街の、あなたの家からおそらく半径2キロ以内の場所、そし  
てあなたにとって思い出深い場所の中心地點から半径5キロ以内の  
どこかにあります。』

はつきり言つてくれ。

『さあ？ 私は伝えるよ』言われただけですから？』

誰にだ。

『むつ、禁則事項です。』

彼女はしまつた、といつ表情を見せつづき、いまだ微笑んでいた。

こんな感じだった気がする。随分と数学的な宝探しである。俺を  
試しているのだろうか。それともメーター片手にスコップかついで  
がむしゃらに掘れど。

いや、彼女はそんなかったることを俺に俺に限つた話しでは  
ないであろうが、やらせるような人ではない。と思う。何かヒント  
があるのだろうか。

それにしても思い出深い場所つて。

ありすぎて困るぜ。

俺はため息を吐きながら、ぼんやりとベッドの横に貼つてある世界地図に目を向けた。

何年前からそのままなのだろうか、埃をかぶってはいたが、汚れなどは見当たらない。

### 世界地図。

縮尺の大きさに反比例して正確指数はどんどん損なわれていくのだと思っていたのだが、案外そういうことは無く、かなりの精度を保っているということだ。

!

そうか、地図を使いやいいんだ。

何でこんな簡単なことに気付かなかつたのだろう。

そういうわけで俺は机に向かい、何年ぶりだろうか、中学のとき地理で貰つたこの周辺の地図を引っ張り出してきた。縮尺2万5千。よく分からぬがなんだか良さ氣な雰囲気なので、とりあえず「ここは喜んでおくことにしよう。俺の不整理整頓には助けられたぜ。」筆箱からコンパスを取り出し、むき出しになつていていた針で手を刺し痛えな畜生！壁に投げつけたくなる衝動を何とか抑え、地図にある黄色い点に針をぶつさす。授業中、自分の家から学校までどれくらいの距離があるか図るために自分の家にマークをつけた、それがこの点だ。

2万5千だから、一キロは2000メートル、1センチ250メートル…

8センチか。

わが頭脳、未だ衰えず。

定規でハセンチを取り、コンパスでぐるりと弧を描く。我ながらきれいに書けた。

後は、思い出の場所探しだが、やはりありすぎて難しい。

「うむむむ…」

そうだ、彼女は言った、家から2キロ、思い出の場所から5キロと。つまり、思い出の場所の中点で描いた丸が、家から1キロの丸と重なり、記憶媒体は、その重なった地域にある、ということなのだろう。

だったら、家から半径7キロ以内のところの『思い出の場所』というはあるんじゃないかな。

おお、今日は汎えてるわ。今数学のテストをやつたらこの點は取れるかもな。知識不足はどうしようもあるまいが。

そして家から7キロ（実際の距離で、だ）を取つてみると、思い出に残つていそうな場所は、一つだけ。

あの、公園だ。

公園の中点から5キロの弧を描く。

そして、交わつた地域に色をつけてみたのだが。

「うむむ……。」

広い。

広すぎる。

果たして、彼女が俺にこんなに難しい要求をするだらうか。ありえない。

多分。

もつと、何かヒントがあるはずだ。

…とりあえず、行つてみようか。いや、ただの時間の無駄になるだけだらう。せめて、場所の田畠が付けば……

何か無かつただらうか。

そうして、地図を見ているうちに、俺はその地域の中に俺の通つている高校があることに気が付いた。

だが、そこで特に何かしたわけではない。退屈な思いしか、してないはずだ。

だとしたらどうだ。

……山は？

情報操作によって作られたであらう、あの山は？

俺はもう一度地図を見る。教室の窓から見えた山は、少し遠かつたが、公園までには至らなかつた気がする。

「行ってみるか。」

わずかの可能性にかけて。

やつとの思いで山の麓までたどり着いた。が山といつてもそれほど大きくは無く、せいぜい学校より少し高いくらいだろう。

……胸騒ぎがある。悪い意味ではない。ここにある、そんな気がする。

俺は意を決して、階段を上り始めた。

……意を決する必要なんて無かつたな。

登り始めてから、実に数分というあまりにもあっけなく山登りは終了を迎えてしまつたのだが、小山とはいえ山を一つ制覇したと思うとそれほど悪い気持ちでもなかつた。

そしてその気分をさらに促進するかのように、景色は綺麗だった。ここでおじきりでも食いたいとは思つたが持ち合わせが無く、おかげでそろそろ昼飯時であるということを思い出してしまつた。

あまりにも強大すぎる空腹は黙殺することにして、俺は記憶媒体を探すこととした。

しかし、山頂は思ったよりも広く、なかなか見つからなかつた。

どれくらい経つただろうか。陽はすでに傾きかけ、時計は四時を指していた。俺の敢行したローラー作戦も敢え無く失敗し、万策つき途方にくれているわけであるが、さてどうしたものか。早くしねえと、いけない……ような気がする。

「……おい」「……！」

いや、本氣で死ぬかと思った。

心臓の動悸を必死に抑えつつ後ろを見ると、見たことがない見たくもない、つーかむしろとと消えてしまふと、初対面にもかか

わらず敵意むき出しで言つてしまふやつになるようないけ好かない  
気障な野郎が立っていた。

「な……なんだよ」

精一杯、すうんでもみたつもりなのであるが、相手は何じゅそりゅ、  
とでも言いたげに鼻でせせら笑つた。

「…フン」

なんだこいつ。

「用が無いんなら帰れ」

「用が無いわけではないが、お前がそつ望むのならそつよ。」  
いや、本氣でなんだこいつ。

「何言つてんだ」

「何も言つていない。俺はただここに存在しているだけだ。  
意味わかんねえよ。」

「お前も同じだろ。」

「俺は違う。」

「では何をしてるのだ。今お前がしてくる」との意義を説明でき  
るか。」

出来るや。

「ハ、どうせ探し物をしています、だろ？」

！

「なぜ知つている?」

「既定事項だ」

「は?」

「いや、なんでもない。といひで」

そう言つて、おもむろに彼はポケットからあるモノを取り出した。  
それは、俺が探していた記憶媒体にそっくりだつた。

「それを…どうで…?」

「ここだ」

彼は素つ氣無くいった。

つておい。そりや俺が依頼された品ではないか。

「それを返せ」

「これはお前のなのか？」

「そうだ、俺のだ。」

「嘘付け。」

むむつ。

俺が言葉に詰まっている間に、彼は置み掛けた。

「なぜお前のものでもないものを俺がお前に渡す必要がある。」

「とにかく、俺にはそれが必要なんだ。……それを、俺にくれないか。」

「もし、俺にも、これが必要だ、と言つたら？」

「！」

だが、と彼は続けた。

「あいにく俺には全く必要の無いものでな。」

くれてやる、と言い捨て、記憶媒体を投げた。取るのも癪なので、知らん振りをしたが、本心としては今すぐにでも取つて無事を確かめたかった。

「あんた……」

「礼はいらん。既定事項だ。」

誰が礼なんとするか。相手が、……あれ、まだ名前聞いてなかつたか。とにかくあの救世主サマだつたら別だつての。

そう言つて、彼は歩き出した。そのまま行つてくれたらありがたかつたのだが、彼は振り向き、俺に言つた。

「妥協はこれが最後だ。今のか弱い貴様を狩つても面白くもなんともない。次に会うときは敵同士……それまで、首を洗つて待つていろ。」

「お……お……」

しかし彼は立ち止まらなかつた。

「……」

追いかけて、あの変態の顔をぶん殴つてやりたかったが、俺の使命はそんなことではないことを思い出し、慌てて記憶媒体のところ

へ走り寄る。

「……無事か」

特に大きな損傷は見られなかつた。

良かった、と胸をなでおろしている場合ではない、すぐに彼女の元へ馳せ参じなければ。

すぐに、彼が降りて言つた道とは反対の道を歩き出した。せめてもの抗いってやつや。

## 第七章 思考（後書き）

僕はものす''」く数学が苦手で、だつたら書くなつて話なんです  
けど何かおかしなこととかあつたらそれは自分のバカさがなせる業  
だと思って、軽くさげすんでください^ ^ ;

## 第八章 情報操作

といつわけで、公園。

自転車を飛ばした甲斐あつて、30分には着くことが出来た。草原に彼女の姿を認められたときには多大な達成感が体を満たしていったが、ルックスは平常を装つた。

「ただいまっす」

彼女はゆっくりとこちらを向いて言つ。

「お帰りなさい。どうでしたか？」

「この通り。」

そう言つて、俺はポケットから記憶媒体を取り出した。そういえば、この人はずっと何をしていたのだろう。

「確かに、これです。……」苦労様。」

「おう」

もしもこれが違かつたら、と考えていたが、杞憂のようだつた。「しかし、情報にいくらか損傷が見られます。修正は可能ですが、少し時間がかかるでしょう。これをあなたに使えるのは明日になりそうです。」

「そうか。」

やつぱりな。

「では、また明日ここで会いましょう。……今度は、朝はんもしつきり食べてくださいね。」

彼女は笑いながら言つた。

「明日は学校だが、それは行つてもいいんだよな？」

「明日は土曜日ですよ？」

「え？」

そんなはずはない。入学式が月曜だった。今日は四日目だから、木曜日のはずだ。

「ええ、本来ならば木曜日のはずなんですが、情報操作により、今

日は金曜日、明日は土曜日となり、四日分の一セセ記憶がみんなの脳内に組み込まれています。

「俺はなんとも無いが。」

「あなたは、特別です。」

納得いかねえな。

「なんで、俺が特別なんだ？」

「あなたは、ずっと自分が特別な存在でありたい、と思い続けていたではありますか。」

そりやそうだけど。

「ならいいではありませんか。そのうち、あなたにお話することが出来るでしょう。」

そう言つて、彼女は俺に背を向け歩き出した。

「待つてくれ。」

「何ですか？」

「あんた、名前はなんて言つんだ？」

あつ、と彼女は驚いたような声を出した。

「言ひ忘れていましたね。私は……飛鳥。水無月飛鳥。」

水無月…飛鳥。

「俺は…」

「如月蒼夜、でしょ？」

やっぱ知つてたか。

「ふふ、では。」

「ああ。」

「ああ。」

そう言つて俺はママチャリに乗り、彼女を見送った。ワープでもすんのかな、と少し期待してたのだが、いらない期待だった。さて、帰るか。

俺は歩いていた。

なぜだろう、と考えたが思い当たる節はない。

とにかく、歩き続ける。そんな意識が頭の中で渦巻いていた。

なんなんだよ、と口に出したつもりなのだが、かすれて声が出ない。

そうか、俺は喉が渇いているんだな、と始めてこの瞬間意識ができた。

だが、意識は朦朧としている。

暗闇の中を。

暗黒の世界を。

俺は一人で歩き続けていた。

だが、不思議と不安、絶望はなく、逆に希望や期待が、俺の心の中ではちきれんばかりになっていた。

そう、俺はワクワクしていたのだ。

なぜ？なぜ俺はこんな状況でも、そんなワクワクしてられなんだ？

何に対して、俺はワクワクしているんだろう。

それは この先に待ち受けるものに対しても、俺は感じた。

漠然とした、何か。それは他の者にとっては恐怖の代名詞となるべきものであろうが、俺にとって、それは長い間求め続けてきたもの。

そんな気がする。

根拠なんてない。

しかし、頭のどこかでは完全に理解しきっていた。

だが、俺がそれを理解することはできなかつた。

でも、一つだけ分かることがある。

それは このまま歩き続けていると、俺が求め続けていたものに出会える。

なにか、とてつもない、大きな間違いを犯した気がする。

しかし、俺は頭がいっぱいだった 前で待ち受ける、何かに対し

て。

歩き続ける。

歩き続けるのだ。

前に待つものが、たとえ絶望であつても

……

……

翌日。

俺は懸命にペダルをこぎながら、公園へと向かっていた。  
そんでもって、俺は一つ面白にことに気が付いた。

「山が……消えてる？」

そう、昨日あの氣障な変質者と出合ったあの山が、消えていたのだ。

あの山の役目は、記憶媒体を、氣障的超変態経由しても俺の手に渡らせるために作られたのだろうか。つまり、あの山は役目を終えたから消失したのだろうか。だとしたら……なんか、儂い。諸行無常の響きはまったく感じられなかつたが。……考えすぎか？それじやあ、まるで俺が特別な人間みたいじゃねえか。

俺は、珍奇な事件に巻き込まれている、純粹な高校生でしかないのだからな。

まあ、いいだろう。ありがとな。なんて。

そんなわけで、俺は公園に到着した。例の場所にはやはり既に飛鳥は来ていた。

「おっす」

「おはようございます」

彼女は腰を45度曲げ、にこやかに挨拶をした。秘書にでもなればいい。もしくは、ミス・ジャパンにでも応募してみたらどうだ、ぶつちきり一位は保証してやる。

「さて……記憶媒体は修正できました。そして、ちゃんと主要な情報を抽出もしてきました。今すぐにでもあなたに装填可能です。」

俺は機関銃か。

「それよりも、だ」

俺は前から気になっていたことを質問した。

「これを俺に装填したとして……、今の俺の記憶がなくなつたりしないよな？」

「もちろん。」

「良かった……。」

俺は心底安堵した。

「さて……やりますか？」

俺は考える……ふりをした。こんなのが、考えるまでもねえ。

「頼む。」

当然だろ？

「分かりました」

そう言つと、彼女は記憶媒体から変なコードを取り出し、そんな機能があつたのか、と驚く間もなく、そしてその先っぽについているものを見て俺はさらに驚く。

それは、人間が本能的に恐怖してしまつものだった。

「注射器！？」

「……そう呼ぶんですか？」

そう呼ぶんですかつて。

「私たちは、『情報注入機器』と呼んでいますが？」

ああ、もはや注入するものも違つた。

「要は、情報を注入すんだろ？」

「その通りですが、まずはその逆、摘出します。」

何でだよ？

「この記憶の中には、この世界においては理解しがたいものなので、まずあなたの中にある『常識』の情報を摘出してから、この情報を注入します。

なんだか良さ氣だな。

「では、後ろを向いてください。」

俺は言われるままに後ろを向く。

「行きますよ」

「おう」「ひむ

俺がそいつ言った刹那、首筋に軽い痛み　いや、刺激が走った。  
「むつ…………。」

意識が遠のくのを感じた。そして、俺は暗闇の世界へと誘われていった。

俺は歩き続けていた。

暗黒の世界を。

すぐ目の前にある、今までずっと求めてきた世界に飛び入るために。

ただ、一つだけ、そんな俺の気持ちに反する気持ちがあった。  
これで、いいのだろうか。

本当に、俺は正しかったんだろうか。

俺は今まで動き続けていた足を、初めて止めた。  
このまま 歩き続けていて、いいのだろうか。

そうして、俺は迷う。

いつまでも、そこに立ち尽くしていた。

なぜ止まるんだ？なぜ迷うんだ？このまま行けば、いいといひに  
いけそうなのに。

お前が、そう望んでいたんだろ？  
いや、俺が求めていたのは  
なんなんだ？

わからねえよ。

なんなんだよ、どうしたんだよ。動け！動けよ……！

しかし、俺の足は動こうとしなかった。

まるで、この足は全ての結果を知っているかの様に……

.....

## 第九章 後悔

「…………むう」

「気が付きましたか？」

静かな声が聞こえた。

俺に話しかけているのだろうか。  
だとしたら 答えねばなるまい。  
ゆっくりと目を開けていく。

まず最初に見えたのは 桜だった。

桜吹雪が舞う 草原。

ここは……どこだ……？

そして、目の前に柔軟な顔をした女  
いや、少女が俺の顔を覗き  
込んでいた。

こいつは……？

「ここは……どこだ……？」

「ここは、国立公園です。」

「国立公園？」

なんで俺がこんなところに

「あつ……」

「思い出しましたか？」

「おお」

「では、一つテストを……情報操作法に違反するような操作を行つ  
た場合は、一般的にどのような処分を受けますか？」

「は？」

「いえ、ただのテストです。……答えてみてください。」

「…………その罪の重さによって、ある期間情報の操作を禁じられたり

……」

「その取り決めのことを、一般的になんていいますか？」

「えつ……、情報操作取締法じゃねーの？」

「その通りです」

「そう言つと、彼女は顔をほころばせた。

「……よかつた」

「…」

「そうか、彼女は俺を確かめていたんだ。  
ちゃんと、俺に情報が行つたかどうかを。

だとしたら 安心していいぞ。俺にはしっかりと刻み込まれてい  
るからな。

「さて……では、試しに、何でもいいですから、出してみてください。

「なんでもいいって……」

逆に難しいのだがな……。

俺は困惑の色を浮かべながら、そして手をいや眼を閉じていっ  
た。

しゃあねえ。あれしかあるまい。

眼をつむりながら、俺は聞く。

「なあ、どうやって情報操作すんだ?」

「分かっているはずです。血ずとやつてくれるでしょう。」

「つづむ

自信はないが、やってみつか。

そう思つた途端

「シリアルコード〇〇789、存在時空間座標8765、13598、  
20070408101536において、物質情報0087653  
の情報創造許可を申請……」

まあ、こんな感じの言葉が立て板に水のじとく出でてきた。

自分が何をほざいているのか、全く分からなかつたが、俺の深層  
心理は何もかもを知りぬくしていいるようで、おかげで俺が混乱する  
ことはなかつた。

「終わった」

そう言つて、俺は手元を見た。

真っ赤な、リンゴがそこにあった。

すげえ。

出来てんじやんか。

「出来ましたね？」

そう言つて、彼女はよりいっそ微笑みを濃くした。

「ああ。」

「綺麗に出来ましたね、初めての人は大体欠けてたりするんですが見事です。」

「そうか？」

そう言つて、俺はリンゴをまじまじと見る。

真っ赤で、それでいてそこそこな大きさだ。

それに……うまそうだ。

「どうぞ、食べてみては？」

「そうするわ」

そういうが早いか、俺は一寸連続のリンゴにかじりついた。

が。

「……んん？」

よくかむに従つて、俺の顔は崩れ始め……（と彼女は言つていた）

「こりゃあ……梨じやねえか……。」

そう、それは形こそリンゴに似ているものの、味は完璧に梨だった。

「なんじゃこりやあ？」

「ふふ、やはり欠けてましたか……。」

「欠けてた……？」

これは形だけならリンゴ形状コンテストで入賞は飾れそうな気がせんでもないくらいの綺麗な橢円形なのだが。

「情報が、ですよ」

なるほど。って本気で分かつてんのか？俺。

「あんたはどんな感じだった？」

「私も最初はリンゴを出したんですが、リンゴは情報羅列が単純な

ので、ほとんどの人がまずリンゴから始めます 私のは四角くて、味は蜜柑でした。」

そういうて、彼女は悪戯っぽく笑った。俺は昨日のりんごの味を思い出した。そりやひでえな。

「ええ、ですから今に至るまでは膨大な努力を要したんですよ?」

「へえ。」

だとしたら、俺がたつた数分で会得してしまったのはどうかと思われて仕方がないのだがな。

「ふふ、それはその情報の持ち主に感謝すべきですね。」

あざっす。

「でよ。俺はこの状況を理解した。そして、すぐえ能力も手に入れただ。だがよ、俺は何をすりやいいんだ。」

「ここで、あなたがすべきことですか?」

「おう」

「そうですねえ……。」

考えるな。

「すぐ、元の世界に戻りたいですか?」

「いや」

俺、即答。

「でも、こつまでも、とくわけにもこきませんし……。」

「なぜだ?」

「いえ、なんでもありません。」

そして、半ば誤魔化すように彼女は続けた。

「しかし、あなたの予想は当たっています。あなたは、自分が口々に来たのは、何らかの理由がある、そつ考えているでしょ?」

「ああ。」

おっしゃると一気にいります。

「その通り、あなたが口々に来たのには、ちゃんと理由があります。」

「それを俺は求めているんだ。」

「ええ。」

「ええじゃなくて。

「では、話をする前に、この世界のことを話しておきましょ。この世界は、ほとんど前の世界と外見は変わらないのですが、中身にはかなりの改变があります。人が消えていたり、逆にいない人がいたり……。ですが、建築物などの違いはありません。」

山は？

「山？」

彼女は驚いている様子だ。

「知らないのか？」

「ええ。」

「俺が昨日、どんな経緯で記憶媒体を手にしたか、飛鳥は知っていると思っていたが……。」

「いえ、全く。」

俺の脳裏には、あの気障な野郎の横顔が浮かんでいた。畜生、とつとと消える。

「……なんか、あつたんですね？」

「まあな。」

「話せます？」

もちろんんだとも。

そして、俺は昨日のことの経緯を話した。いまさら描寫するまでもないだろう。地図を引っ張り出して、コンパスで弧を描いたこと。コンパスで手を刺したこと、そして、山での出来事と、彼の捨て台詞。

「『妥協はこれが最後だ。今のが弱い貴様を狩つても面白くもなんともない。次に会つときは敵同士、それまで、首を洗つて待つている』……ですか。」

そう言つと彼女は口をつぐんだ。何か考へているような仕草。

「…………。」

おじおじ、大丈夫かよ。

俺がそう言おうとした直前、彼女は急に目を見開いた。カツ、と  
いう効果音が聞こえてきそうな感じだ。

「その人は、おそらく私たちの敵対勢力の幹部でしょう。」

「……？」

「どつかのアーメか？」

「そいつの名前は？」

「周防忠竜です。」

「周防忠竜……。」

「とにかく、周防はあなたに宣戦布告をしてきました。あなたへの宣戦布告は、我々への宣戦布告、と受け取ってまず間違いないでしょう。」

「宣戦布告？」

「俺への宣戦布告は飛鳥たちへの宣戦布告と同じ、とはどういう意味だ？」

「ええと……。」

初めて見た。飛鳥の、少し惑つような顔。言つてしまつていいのだろうか、というような顔だ。

「あなたは、私たちの組織の一員、といふか保護下に入つていて、つまりあなたはこちら側の人間、ということになります。それゆえ私たちへのそれというようになります。」

「本気でアーメっぽくなってきたぞ……大丈夫か？」

「どうか、まず組織について教えてくれよ。」

「わかりました。……私たちの世界では、二つの組織による冷戦状態が続いていました。」

過去形か。

「ええ。彼らの組織は、長い間私たちの組織と敵対してきました。といつてもさつき戦つたとおり、冷戦状態 矛を交えぬ戦いの状態になりました。」

「なぜ敵対していたんだ？」

「事の起こりはだいぶ前にさかのぼりますが……、彼らの組織は、

元々私たちの組織の一員でした。しかし、時がたつにつれて彼らは私たちと尻馬が合わなくなり、反感を抱いた一部の人間がこの組織を抜け出し、またもうひとつ別の組織を発足しました。それが彼らの組織です。

「これはどうでもいいことなんだが、組織に名前はついているのか？」

「知りたいんですか？」

だから質問しているのだろうが。

「仕方ないですね。本来ならばあなたに教える必要がないことなのですが……」

まあ、いいでしょ。私たちの組織名は、略称R O A Fです。また彼らの組織名は、略称B O Wです。」

随分とありがちな。

「さて、彼らは私たちを潰すべく、冷戦状態を解除し、ついに行動に出ました。その第一段階が、戦闘意思表明　あなたへの宣戦布告なのです。彼らはあなたを標的に絞つて攻撃を仕掛けてくるでしょう。」

「！」

「ど…ど…じ…う意味だ？」

「彼らは、あなたを殺めるべく動くでしょ」と言っているのです。

「……。」

乱れに乱れる俺の心をいつたん落ち着けてから、俺は言った。

「な…何で俺なんだよ。」

「あなたは、唯一の異世界人ですから。」

納得いかん。

「まあ、気にしないでも大丈夫です。」

「……。」

彼女の言葉で俺の心の中の天気は大嵐から小雨くらいまでに落ち着いたが、しかしどんよりとした気持ちは依然として晴れない。

なぜ俺なんだ？

ほかにもいろいろな人がいるだろ？」、それに俺はこんな組織なんて知らねえ。それなのに、なぜ俺が殺されねばならない。

しかし、沸いてくるものは恐怖ではなく、なぜか他の気持ちが満ち溢れてきた。

「……私が、守りますから。」

続きを言った。俺の心に光が差し込んできた。  
面白くなってきたじゃねえか。

そう、漫画、アニメ、ゲームの好戦的な主人公は言つ。

俺は、この言葉を聴くたびに何ぼぞいってんだ、と思つていたが、この時ばかりはその考えを変えてもいい、と思つた。

「では、そろそろ移動しましょうか。」

「移動つて、どこにだ？」

「……私たちの世界に、ですよ。」

そういうて、彼女は微笑んだ。

面白く、なつてきたじゃねえか。

「目を、閉じてください。」

「了解」

そう言つて、俺は目を閉じた。世界が暗くなる。当然だけど。

「私が言つまで、決して目を開けないでください。……私が手を引きますから、歩いてきてください。」

「りょーかい」

俺は手を差し出した。暖かい、柔らかいものが俺の手を握った。

「歩きますよ」

そう言い、彼女は歩き出した。なかなか怖いが、けつまづくようナドジはしなかった。

まさか、あんなえらい目に遭つなんて、予想だにしなかったね。

## 第十章 激昂

五歩くらい歩いたら、急に背筋が冷たくなった。

「うむ」

「我慢してください。後、絶対に目を開かないでくださいね。」

彼女はそう念を押して歩き続けた。

頭が割れるように痛い。耳鳴りがする。寒い。暗い……

俺は迷っていた。

このまま行つてもいいのだろうか。

このまま、先へ進んでいいのだろうか。

行けよ。お前、ずっとそこに行きたくて行きたくて、仕方が無

かつたんだろう?

確かにそうだが……。

なら、行けよ。お前が、そう望んでいたんだろうが。

いや、だめだ。行っちゃいけないんだ。

なんでだよ。

わからねえ。でも、行っちゃだめなんだ。

行けよ。

だめだ。

行けよ。

いやだ……

「……きて……くだ……お……きて……」

いやだ、いやだ、いやだ……

「起きて下さい！」

「いやだああああっ！――

「蒼夜さん、しっかりしてください――」

「！――」

太陽が、目にしみる。

「……？」

「大丈夫ですか？」

そういうて、心配そうに俺の顔を、誰かが覗き込んだ。

飛鳥。

「う、うーむ……。」

「しっかりしてください、もう大丈夫です。着きましたから。」

俺は力なく首を振った。縦に。

「ここは……？」

「私たちの世界 異世界です。大丈夫、無事に着きました。」

「俺は大丈夫じゃないな……。」

「ふふ、でもそこまで話せるなら大丈夫です。良かつた」

そう言つて、心底安堵したよつた表情になつた。

「立てますか？」

「なんとか」

そう言いながら、俺は普通に立つた。ようやく落ち着いてきた。  
唇が痛い。触ると、ガチガチになつていた。

「水、ない？」

「あります、少し待つてください。」

そういうと、彼女は、また呪文を唱えだした。

「エマージェンシー・コード。優先コード01、シリアルコード54  
67、存在時空間座標GOSにおいて、物質情報00876553の  
緊急情報創造許可を申請……」

「む。」

エマージェンシー・コード？俺の唇の渴きがそんなに緊急か。

「はい、どうぞ。」

そういう、彼女が差し出した物は、紛れも無いア・カップ・オブ・  
ウォーターだった。リンゴの時より、ずっと主要時間が少ないのは  
気のせいだろうか。

その水を流星のごとくのみくだし、それに『史上最強水』の称号  
を与える、一段落つくと、俺は周りを見渡す余裕をえた。

「お?」

立ち並ぶ家々。  
いくつかの小丘。

「いは?」

「私たちの世界ですよ?」

「本當か?」

「……なんですか?」

「だつてよ……。」

ちらほら見える、自動販売機。

「前のところと、変わんねーじゃんかよ。……。  
そう、そこには俺が十五年間何もしないをしながら住んでいた、あの町に変わりないのだ。」

「表面上は、」

彼女は真顔になつて続けた。

「変わりません。」

「どういう意味だよ。」

「しかし、内面には、著しい変化があります。山や、お友達の消失  
なんて、序の口です。」

「なんだと……?」

「ここでなにをしりつてんだよ。」

「……。」

彼女は困ったように顔を曇らせた。

「どうした……?」

「わかりません。」

「は?」

「私は、上の人間に、あなたをここに連れて来いと、言われただけですから。」

「ふざけるなよ。」

「え?」

「俺は……脱出を求めていたんだ。この退屈な世の中からのな。そ

れで、やつと、と思ったのに。……ふざけるなよ！」

彼女は田を見開いていた。そんな表情を見るのは初めてだつたが、それでもどこか演技っぽく、俺の怒りを助長するに足るものだつた。俺は彼女に背を向けて走り出した。思いつきり、あてもなく。

何なんだよ……。

「何なんだよ……！」

「そうこういふことね。」

飛鳥は言つた。激昂し、走り去る如月の後ろ姿を眺めながら。「だから、私にここまで……。」

それくらい教えてくれてもよかつたのにな、とため息をつき、彼女は空を見上げた。空はいつもより青く、澄み渡っていた。

「神を夢想世界に放置しておくるのもどうかと思つけれど……。一応、申告しておこうかな。」

そう呟いた次の瞬間、もつそりに飛鳥の姿はなかつた。

## 第十一章 虚無に帰す

「はあ……、はあ……。」

「どここまで走ってきたのだろうか。俺の脚と心肺機能は限界を宣言し、自動停止機能を発動した。要は、もう走れねえ、ってことだ。」

「畜生……。」

「畜生。畜生。

「畜生！畜生！」

「俺は……。

「なんで……なんでだよ……。」

「結局……俺は……。俺は……」

「なんでだよ？……！」

「…………。」

「あ……あ……あ……あ……。」

「何だよ……！」

「！－！」

「俺は勢いよく起き上がった。田の前に、何かがあった。

「び……びっくりさせんなよ。」

「？」

「人。」

「…………おい？」

「その人は、ここにはいないはずだった。抹消された、はずだった。」

「どうしたんだ？」

「なぜここに？」

「おこ……！」

「彼が俺の肩をイライラしたようにつかむ。」

「黒……川……？」

「おつ！」

「黒川。存在しなかつたはずの人物が、ここにいる。」

「大丈夫かよ。マジで。うなされてたぞ？」

「うなされてた……？」

「ああ。お前、朝貧血で倒れて。心配してよ。休みを見計らってここに来てみたんだ。そしたら、お前なんかうなされてて、寝言っぽいの言つてたんだ。最初面白くて聞いてたんだが、途中からちゅうとやばくなってきたから。起こしたんだ。」

「どんなことを言つていた？」

「情報がなんたらとか、シリアルコードがどうたらとか。随分と哲学的な夢を見るんだな、と思つて聞いてた。で、お前急に畜生、とか大声で叫び始めて。」

「…………」

「哲学的な……。

「夢……？」

「ま、頭はギリギリ大丈夫みてーだから、俺は行くぜ。さつせと授業に合流しろよ。笹原が、寂しがってるぞ。」

「そうか」

しかし、その返事の相手は、黒川ではなかつた。黒川が出て行くのを見届けてから、俺はため息を吐いた。

「ここのは、保健室。

「夢、だつたのか……。」

「そう、夢だつたのだ。」

情報操作も、記憶媒体も、あの気障な変態も、水無月飛鳥も。あそこであつた、全てのことだが。

「…………夢だつたのだ。」

「…………ああ……。」

「そうか、夢だつたのか。」

「もしも、これが夢だと分かつていたのなら。」

「俺は、あそこで走り去りはしなかつただろう。あの時、俺は絶望したのだ。」

やつと、退屈な世の中から脱出できる、と思つて期待していたの

に。

例えるなら、一ヶ月前から親に頼んでおいたクリスマスプレゼントを、クリスマスイブに興奮して眠れないくらい楽しみにしていたのに、それが頼んだものじやなくてどこかの問題集だった、そんな心境だ。

悔しい。

でも、あんなの、現実であるはずがない。

そう、夢だったのだ。

この世の、実際にあつたことではないのだ。

そうや。現実に、あんなことが起こるはずがない。  
夢でないはずがない。

ふうっ、とため息を吐き、俺はベッドから降りる。俺にやつと存在を気付いてもらえた保健の先生にもう大丈夫、授業に合流します的な事を言つて、さりげなく俺は部屋から出た。

教室に戻つても、特に変わつていることはなく、やはり夢だったな、と俺は憂鬱な心象になり、その心象のせいか、一人で窓の外を眺めていた笹原に何のリアクションもしなかつた、する気になれなかつた。

その憂鬱を引きずりながら、今日は過ぎていき、時は流れた。

しばらくの間、俺に平穏が訪れた。

しかし、そのしばらく、というのもさう長くは続かなかつた。五日後の、ことだつた。

五日後、と宣告したからにはやはり五日後の世界にフードインすべきなのだろうが、やはりここは俺の身の上の変化についてあらかじめ述べておくのが筋であろう。そう思つて俺の五日間の生活の全てを描写したいところなのだが、そんなのはめんどくさい以外の何者にも当てはまらないし、そもそもノーマルな男子高校生の全てを描写したところで、それを喜ぶ変態がこの中にいるだろうか。例えいたとしても、そんな変態に好かれたいとは天地がひっくり返つても思いたくないので、丸ごとすつ飛ばしてしまうことにして、とりあえ

えず結果をお伝えすることにしようと思つ。

結果としては、この五日間、何もなかつた。

そりやあ学校も行つたし、学校ではなにもしないを完璧にしていた  
し、家に帰つても寝てるかテレビ見てるか飯食つてるか本読んでる  
かのどれかだし、結局この五日間は平穀無事、天下泰平、のほほん  
としたものだつた。

さて、これで心置きなくフォードインできるつてもんだ。

## 第十一章 伝達人

五日後。

五日間の間は特に起らぬ、平穏な時が流れた。その日も、俺はなにも考えずに、と言つても、早くも遅刻常習犯のレッテルを貼られた自分に自責の念で心をいっぱいにしながら、時間よ止まれ、と祈りながら、パンで口をもごもごさせながら、八時十分を示し、遅刻を示唆する時計を日の端に捕らえながら、そりやもう慌てていた。

ひらりとカウボーイ顔負けのテクニックで自転車に飛び乗り 五日間なにもなかつた、と言つたが、一つだけ大きな変化があつた。寝坊対策として、俺はチャリ通を採択したのだ。思考時間約0・5秒という脅威の速さで採択の結果を迎えたのだが、おかげで俺は時間がぎりぎりまでベッドと同一化を図ることに成功し、余計に朝が慌しくなる結果となつた 学校の近くの超天然的公共駐輪場に全速力ですっ飛ばした。超天然的公共駐輪場つてのはマンションの裏にあつた。じめじめしていて光も当たらず、それでいてまあまあ広さを誇つている。まさか誰も、特に学校関係者は来ないであろうと推測できる、いわゆる名所だ。この時間帯は寝坊対策としてチャリ通を採択し、その置き場としてここを苦渋の末に選択した同志がいつぱいいるであろう。

いつも通り。

…………  
どのような天才でも不可能なことはあるように、やはりこの自転車も俺を遅刻前に学校へ送り届けることはどうやら不可能のようだ。

天然公共駐輪場の利用者と軽い挨拶を交わしながら俺は学校のチャイムの音を聞いた。その利用者と目が合い、軽く肩をすくめながら俺は学校へのダッシュを決行した。もう一人の方は完全に腹をくくっていたようで、チャイムの音にも全く動じず、『まあ頑張れや』

とだけ言つて、なぜか俺とは反対の道を歩き出した。

俺の猛ダッシュもむなしく、校門は既に固くしまり、乗り越えるか、職員玄関を使うかの一者择一を迫られた。職員玄関に行くと、98%の確率で事務の人見つかり、『遅刻』の烙印を押されてしまうが、ここを乗り越えれば、先生にも見つからなければ、そして榎原氏が少し遅れていれば、いわゆる『ギリギリセーフ』って奴になる。考へるまでもないね。

そう思ひ（何を思つた）校門に足をかけようと思つた刹那、俺は後ろに無言の気配を感じた。

「……」「……」

恐る恐る振り返つてみると、そこには、見かけない顔の女子がいた。

「うおっ」

これ、俺。

「……」

三點リーダ三つ分の空白を作り、彼女は不思議なものでも見るかのよつて俺の顔を見た。

「……」「……」

氣まずつ。

「えつと……どうした？」

「……」

相変わらず三點リーダを台詞とする彼女。

「遅刻か？」

俺がそう聞くと、彼女はミリ単位で顔を下げる。首肯のつもりなのだろう。

「もしかして、どうしたらいいか分からぬとか。」

少し間をおき、首肯。

「仕方ねえな……。」

彼女の返事は、相変わらずの三點リーダ。

「分かつた、ついて來い。」

首肯。

かくして俺は遅刻を隠滅するラストチャンスを失い、おまけに正体不明の女子を引き連れて職員玄関を通らねばならないという一生に一度あるかないかの不思議体験をすることになつたが、それほど悪い気分でもなく、たまにはいいか、くらいにしか思わなかつた、思えなかつたのだ。それほどまでに、俺の鋭敏だつたはずの異変察知能力は鈍つっていたのだ。

だがそん時の俺は全くそんなこと考えもせぬ、この場を少しでも人間的なものにしようと努めていた。

「転入生？」

否定の動作。

「名前は？」

少しの間を空けてから、彼女は言つた。

「神無月沙紀」

意識していなかつたら、耳を素通りしてしまいそうな、そんな声だつた。

「永田？」

「神無月」

「神無月？」

「そう」

「そうか」

「……。」

場の雰囲気はいつそう無機質的なものになつてしまつたが、そのことを意識するまもなく俺らは職員玄関に立つていた。

「入るぞ」

「……。」

ついに彼女はリアクションをしなくなつたが、そんなことで氣を悪くしてしまつていては始まらないので、それは率先して学校に入つた。しつかり『遅刻』の烙印を押され、教室へ向かう。つと、一つ聞き忘れたことがあつた。

「神無月、クラスは何組？」

「六組」

「あれ、同じ……か？」

首肯。

あれ？こんなやついたつけか？

まあ、まだ学校始まって数週間だし、しかも目立たないタイプだし。

「……。」

黙々と階段を上がる俺。

「……。」「……。」

相変わらず三點リーダーの神無月。

またもや氣まずい雰囲気になってきたので、何か話題を振ろうとした刹那、彼女は貝殻のようにしまっていた口を開けて、こんな事を言った。

「氣をつけて」

「は？」

「……。」「……。」「……。」

反応ナシ。もうこれ以上何を言つても無駄だろう。それくらい俺でもわかるだ。

俺らはその沈黙を守りながら、いつしか教室の前に立っていた。  
さて、どうゆう風に入ろうか。

後ろからこつそり入るか、そんな事を考えていたら、俺の後ろにいたはずの神無月が俺の横に回り、そしてゆっくりとドアに手をかけた。

ガラ。

開けやがった。

しかも、俺がドアの前に立つていてのには。

しかも、神無月はドアの裏について皆からは死角だ。  
してやられた。

そう思う間もなく、

「あ、ソーヤ、遅刻！」

「遅刻遅刻！！」

そんな野次が川口、江藤あたりから飛んできた。遅刻遅刻、という割には、着席している生徒は半数にも満たなかつたが。

こうなると俺はもう完全に開き直り、堂々と教室に入る。が、そこにミスター情熱こと榎原はまだ来ていないようだ。

俺は彼らの野次に屈することなく前進を始め、彼らの野次も消えかかつた瞬間、俺の後ろに神無月がついて入ってきた。彼らはそこを見逃さなかつた。

「あ、ソーヤ、カノジョと一緒に登校かよおー！」

「うわ、お前だけは、って信じてたのにつ！」

なんかとてつもない誤解をしている。

「校門でばったり会つただけだつて」

「嘘つけい！」

「マジだつての」

「神無月さん、マジすか？」

「……。」

神無月、ナイス無視。

「信じろつて」

「ふう〜ん？」

そういうつて彼は俺のことを、続いて神無月を比べるよう見、そして大きくうなずいた。

「ま、そうだよな。神無月が、しかもソーヤと……なんてありえねーか」

「てめ、いつ死んでみつか」

「また次の機会に」

そういうつて肩をすくめた。

「アホ」

ちなみに、神無月は終始無表情だった。

これ以上立つてもいいことは無さそうなので、俺はとつとと席

に着く事にした。

が、俺が席に向かおうとするとい、後ろから神無月がついてくる。

「神無月、どうした？」

「私の席」

そういうて、彼女は俺の隣の席を指差した。

「そこだったのか」

首肯。

「そうか」

「そう」

気付かなかつた、といつて無駄に人を傷つけるほど俺は無神経ではない。意外とこいつも『テリケート』そだし。

「遅くなつてしまない！ ホームルーム、始めるぞ！」

と、ここで神原氏登場。

席についてなかつた馬鹿ども（俺含む）はそそくさとこすに座り、神無月はゆつくり、神々しさを感じさせるほど悠々と座る。

『氣をつけて』

神無月は、俺に、確かにこいつ言つた。なぜだろ？。とこつか、何に気をつけろと言つのだ。

ちら、と神無月の顔をうかがう。俺の隣に鎮座している神無月沙紀は、背筋をピンと伸ばし、だが目は先生を見ていない。雪を連想させる色白な肌、中途半端なおかつぱ頭シャギー入りを春風になびかせ、よくみりやそれなりに整つた顔立ちだ。しかもソーヤと……、とかいったアホの気持ちもわからんでもない。しかしその闇色の瞳から読み取れるものは何一つとしてなく、ただひたすらに無表情だった。

「如月、神無月がそんなに気になるのか

おうよ。誰でもこきなり『氣をつけて』とか言われたら『氣になるだろ』がよ。

「みな見するなよ。」

「うつせだ。とは言わずに

「ういっす

とだけ言つておこり。

ドッとき笑い声。しかし神無月は無反応、無表情。

ホームルームはおろか、授業も集中できなかつたことは、言つまでもない。

……。

放課後。

榎原先生のいいところは、何よりも教育熱心で、生徒の意思を重んじることです 誰かがそんなことを先生紹介の作文に書いていたが、俺が思うに、彼の最もいいところは帰りのホームルームが一瞬で終わるところだと思う。いや、こんな考えを持っているのはおそらく俺だけではあるまい。大口開けて笑つてる黒川も、必死こいて問題集とにらめっこしている笹原も、そしてこの作文を書いた生徒も、みんな彼の瞬殺的ホームルームを一番の長所だと考えているに違いない。

実際、今日のホームルームも彼は十秒で終わらせてしまった。他のクラスがまだホームルームをやつている様を見てあざ笑うのも、六組の生徒だけに許された特権なのである。

そんなことを考えながら、俺はのうのうと教室を出た。黒川たちの『今日遊ぼ』

コールを俺は全て却下し 意味などない。強いて意味を持たせようとするならば、恐らく『めんどくさい』が最有力候補に浮かび上がってくることだろう 例の天然駐輪場へ足を運んだ。

## 第十三章 真実

その時俺は駐輪場から無事に自転車を運び出し、悠々と自転車をこぎながら家へ向かっていたのだが、家まで後數十メートルの地点で、俺は家の目の前に、誰やら人が立つてることに気が付いた。

「……？」

誰だ？ 黒川たちとは遊ぶのを却下したはずだ。まだ諦めてねーのか。そう思いはじめたのだが、距離が近づくにつれ、俺はその考えを払拭せざるを得なくなつた。

「……神無月？」

整つた顔がこちらを振り向く。そう、そこに立つてのは、他ならぬ神無月沙紀だったのだ。鞄を両手に持ち、背筋をピンと伸ばして、ちょこんと人形のように立つていた。

相変わらずの無表情で。

「……。」

そして、相変わらずの無反応。

「俺を待つていたのか？」

「そう」

「なぜ？」

「あなたに言わないといけないことがある」

「学校じやまざいのか？」

「少なくとも、他人に聞かれるのは避けるべき」

「ここじゃダメか？」

「だめ」

「どこならいい」

俺がそういうと、神無月はゆっくりと、だがしつかりと俺の家を指差した。それも、なぜか俺の部屋があるであろう位置を。

「家中？……がいいの……か？」

首肯。

「……そうか、わかった、上がり。」

首肯。

神無月を家に上げ、母の尋問をかいぐぐり、俺の部屋まで連れて行くのはかなりの労力が必要とされ、早くも半日分の精神力を使い果たした俺はベッドに座り、神無月の話を聞く体勢になつた。

「よし、ドアも鍵は閉めたし、お袋にも近づくな、と言つておいたで、話せりは、なんなんだ？」

「……。」

また三點リーダカよ……。

そう思ったのだが、俺は神無月の意外な表情を見た。その顔は、明らかに迷っていた。

「……どした？」

「……なんでもない。……話していい？」

いいけどさ。

「私はあなたに色々な、けど重要なことを話さねばならない。でも、全てを完璧にあなたに伝えることは今の私には難しい。もしかしたら話していく途中に、齟齬が発生するかもしれない。でも……信じて」

彼女の、かつてなにも感じさせなかつた無機質な眼の中に、俺は懇願と真摯な訴えの色を見出した。

本気だ。

「ああ、わかつた。出来る限りは信じることにしてよ。」

「よかつた」

彼女は安堵したような声を出し、俺が驚いたのもまでもあるまい話を続けた。

「今、私があなたに伝えるべきことはたくさんあるのだけれど、まづ伝えなければいけないこと、それは……ありがとう。」「は？今、ありがとう、って言つた？」

「うう。」

何故。

「あなたは、本来どの時空間座標において存在しないはずだつた私を生み出してくれた」

時空間座標？どこかで聞いたことあるような、ないような。

「あなたは存在することすら許されなかつた私を唯一受け入れてくれたひと」

「……。」

「それだけじゃない」

彼女は続けた。いつからこんなに饒舌になつたんだ。

「あなたは私の存在を許してくれたのみならず、私に使命を与えてくれた。存在する意味を、あなたは私に与えてくれた。いくら感謝しても足りないくらい」

「待て、その『あなた』ってのは俺のことか？」

「そう」

「俺が、お前に？」

自分さえわからぬ存在の意味を教えたつて言つのか？

「そう。私の使命は あなたへの、真実の伝達。」

真実

「この世界は、五日前に改変された世界。改変のつじつまをつけるために、一般人には偽の記憶データを、あなたは、あの出来事があたかも夢だったかのようにされている。すべては、真実に目を向けさせないために。」

「は？」

「あなたは、五日前、保健室で覚醒した。その時、あなたは夢を見てた。」

「……ああ。」

「そこであつた全てのことを、あなたは夢、で片付けた。……でも、あれは……。」

彼女は一瞬躊躇して続けた。

「夢じやない。」

「！！」

「 改変者が、あたかもあれが夢だつたかのよつに世界を改変した。あなたに、真実から眼をそらさせるために。」

「 真実……？」

首肯。

「 改変者は、あなたのことを、できるだけこの世界にとどめておきたかつた。しかし、あなたは私という媒体を通して真実の伝達を図つた。」

「 改変者つてのは……誰なんだ？」

「 現段階においては」

そこで言葉をいったん切ると、彼女は空をいや、白い天井を仰ぎ見た。その表情に浮かんでいたのは、なんだろう。まるで、これから言ひ冗談に自分が笑いそうになるのを感じえているかのようだ。まあ、神無月はやっぱり無表情だが、明らかに彼女は少し変わつた。俺にだつて、手づくり望遠鏡くらいの観察眼はあるのだ。

「 禁則事項」

そつ言ひと、彼女はうつすらと、だが確かに、微笑んだ。

俺は遠ざかる神無月の影を見送り、そして自転車に飛び乗つた。  
行くべきところは、言ひまでもあるまい。

公園だ。

なるべく早くほつがいことこいつことなのだ。

俺は公園にすつ飛ばした。

## 第十四章 相見

俺は神無月との会話を思い出していった。

『あなたはそこに行かなければならぬ』

『なぜだ』

『水無月飛鳥との合流を図り、彼女に導いてもらつたために。でも、彼女はあくまで導き手。道を切り開くのはあなた。』

『神無月は？』

『私は、あなたに真実を伝達するだけ。でも、また会える。まだ私は、あなたに話さなければいけないことのうち半分くらいしかまだあなたに話していないから』

『半分か。』

『その半分は、また会つた時に。』

『首肯。』

『あと、私のことは、水無月飛鳥には伏せておいて欲しい。』

『なぜだ？』

『彼女は私の存在に気付いていないから。』

『あまり気付かれたくないのか？』

『出来れば』

『わかつた』

まあ、こんな感じの会話だつた気がする。神無月の言うことは大体真実らしいし、この状況下において俺が取るべき行動パターンのうち最善の行動が、今すぐ俺が、あの公園に直行すること（神無月：談）だそうだ。神無月の言うことに疑問を感じるわけでもないし、ましてや反抗する意味がどこにあるうつ。さ、急ごうか。

「……よかつた、またあなたが来てくれて

「ああ、悪かつた」

俺が話している相手は誰であろうつ、水無月飛鳥、その人だ。久しぶりに見た温厚な顔に、俺の荒んだ神経はだいぶ修復され、それと共に多大なる安堵が俺の中に転がり込んできた。

「びっくりしました。あなたが走り去ってしまってから、すこく強力な时空震が観測されたのですから。」

「时空震？」

「ええ、时空を改変するときに発生する时空の歪みのことです。我々は时空震を観測し、それで改変の規模の大きさを知ることが出来ます。」

「りんご」を出したくらいじやあ何も起こらないのか？」

「ええ。山の一つや一つ創造しても、我々に観測できる揺れは「ぐわづか」です。トライックが道路を走るときの振動よりもほんの少し大きい程度です。」

「……じゃあ飛鳥が観測した时空震てのはどんくらい大きかった？」

「……そうですね。東京直下型地震の震源の真上にいたときに感じる揺れくらいでしょう。」

「東京直下型地震……？」

そんなのあつたっけか……？」

「えつ……？ 知らないんですか？ 壊滅的な打撃を受けた、あの大地震を……？」

知らないも何も、俺にそれを求めるのだったら、まず俺に知らないものを知るすべを」教示していただきかねばなるまい。

「でも、あの规模の地震ならここにも……あつ……！」

彼女は心底驚いたような表情になつた。

「まさか……まだ……？」「めんなさいー私……とんでもない間違い

を……。今の、全部忘れてくださいー！」

そう言って頭を下げた。

許さないも何もあるまい。

「ああ、大丈夫、全部忘れた」

「よかつた……。」

彼女はほう、と心底安心したようなため息をついた。

「とにかく時空震は比類できないほど大きく、凄まじいものでした。それは、それだけの改変が行われた、という裏づけにもなります。」「というと？」

「時空改変を行ったものは、おそらくあなたに、全てを夢と思わせ、私との連結を断ち、そして独りになつたあなたを狙うつもりだつたのでしょうか。そのうえで、再び連結が出来たのですから。……助かりました。よく、この出来事を夢じゃない、と看破しましたね。」

「……まあ……な。」

看破したのは神無月だが。

「……つと、神無月のことはタブーだつたっけか。」「どうしました？」

「いや。それよりも、その時空改変を行つた野郎は誰か、分かってんのか？」

「日星なら。あなたも付いているでしょ？」

俺の脳裏に、あの変態が映し出された。消えろ。

「ああ。周防か？」

「周防忠竜か、その一派でしょう。私たちもそう確信しています。

……これ以上何かをされても厄介です。そろそろ決着をつける頃合でしようか。」

俺はまだ何もされてねえぞ。

「ええ。されていてはまずいのです。あなたに擦り傷一つ負わせることがさせません。」

なんでしたまた。

「なんで、とは？」

「なんで、俺をそんな特別扱いにするんだ？」

「唯一の異世界人だから、といつのも無くも無いのですが、……ええと、禁則ですね。」

「……禁則か。」

「すみません、でも、そのうち話題がなきなることじょうから。」

期待してなかつたからいいけどさ。

「で、これからどうすればいいの?」

「んー、何をするってことでもないんですね。私はあなたの護衛みたいなものですし、けりをつけるにも、敵がないのだから何も出来ませんし。」

また随分と楽観的な。

「そうだ。」

彼女は思い出したように言ひた。

「あなたに、拘束解除プログラムの発動方法を教えておく必要がありましたね。……すっかり忘れていました。」

彼女は軽く微笑むと、すぐに、キツ、とまじめな顔に戻つた。

「拘束解除プログラム。それは情報操作のリミッターを取り除くこと。普通なら、創造できるのはせいぜい小山くらいですが、拘束解除プログラムを発動すれば、もつとさまざまなもののが創造できます。」

「彼女はいつたん言葉を切ると、また呪文を唱え始めた。次は何が出てくるのだろうか。

「シリアルコード5467、存在時空間座標GOSにおいて、拘束解除プログラムの発動を申請。A級コード0987の情報創造許可を申請……。」

こんな感じだった。

彼女は眼を見開く。そして彼女は手にあるものを持っていた。

「……おお」

それは、異世界冒険ファンタジーの象徴ともいえるものだった。

黄金の柄、すらりと伸びた、鋼の刀身。

「……剣?」

そう、紛れもない剣だった。

「ええ。もしかしたら、彼らは私がそばにいないときにあなたに攻撃を仕掛けてくるかもしれません。その時のために、これを持つておいてください。」

持つておいてくださいって。まだ前科を犯したことの無い善良な高校生に銃刀法違反及び殺人（未遂）の罪を犯せと？

「いえ、それは、見た目は剣ですが、……刃を触つてみてください。」

「言われるがままに、恐る恐る触つてみる。冷たい感触は……伝わってこなかつた。」

「ニセモノか？」

「ええ。でも、やっぱりそれで斬られる 殴打されると痛いです。それに、それを見て、相手が怯むかもしませんし。その隙に逃げてください！」

そう言いつつ、彼女は柄についていた飾りを押した。カチッ、と小気味いい音が響き、次の瞬間には、剣は折り畳み傘小さの大きさになつていた。

「折りたたみ機能付きか。」

「ええ、便利でしよう？どこかの異世界冒険ファンタジーでも「でも、いざとなつたら、如月さん。あなたの能力で、本物の刃を持つ剣を創造してもかまいません。ええと、『せいとうぼうえい』つて奴です。」

正当防衛？それはヨーロッパだからどうかだった気がする。

「まあ、特に気にしないでもいいでしょう。ここはあなたにとって、異世界なのですから。あなたがここで何かをして、よっぽどのことでない限り現実世界には何も反映されないでしょう。ただ、あなたが死んでしまうのは困ります。」

冗談のつもりだろうが、俺の背中には悪寒が走つたぜ。

「すみません、でも今のは本当です。」

別にいいけどや。

「……んつ。」

「どうした？」

彼女は急に眼を閉じ、考えるよひなしぐれをしたかと思こいや、「ちょっと野暮用が出来ました。少しの間だけですが、あなたの側を離れねばいけないようですね。」

と、世界恐慌第一弾並に空恐ろしことをさうつと言つてのけた。

俺の驚愕の表情を見、彼女は諭すよひにいった。

「なに、すぐ戻つて来られますって。」

「……その間、俺は何をしてればいい?」

「何でもいいです、普段と変わらぬ生活を送ればいいじゃないです。」

「そんなんでいいのか?」

「……やむを得ません。明後日、ここに来てください。時間は指定しません。ここで落ち合いましょう。」

飛鳥と一緒に行くことはだめか?

「……だめですね。」

飛鳥は、その間に世界にいるのか?

「ん、禁則事項です。」

なんか、俺が少し突つ込んだ質問をするたびにこの会話詞を聞いていれる気がする。

「では、明後日、また会いましょう。」

その言葉は確かに聞こえたはずだった。が、俺の耳の前に、すでに、とでも言ひべきか、飛鳥はいなかつた。

「普通……か」

それは、かつて俺が畏っていたもの。

そして、今の俺には無縁なもの。  
自然に笑みがこぼれてきた。

さて、帰るか。

「……」

「……」

一面の暗闇。

真つ暗。

何も見えない。

でも、不思議と恐れ、不安、といった感情は無く、俺の心には、本当にこれでよかつたのだろうか、という後ろめたさと、ただ、ただ喜んでいるだけの単純なものしかなかつた。

本当に

これで、よかつたのだろうか。

……暗闇の世界に。

光が差し込んできた。

周りは何も見えない。だが、その光を発している物は見えた。あれは

人間。女だ。

飛鳥?……いや、違う。飛鳥じゃない。飛鳥はあんなに髪が短くな

い。

誰だ。

ふと、一瞬、ほんの一瞬だが、答えが頭に浮かんできた。しかし、前述したとおり、ほんの一瞬だった。

誰だ。

「うむむ。」

「うむむ。」

光が目に入つてくる。

朝、だ。

ひょいとベッドから飛び降り、時計を見た。

六時半。

おお、こんな時間に起きたのは何年ぶりだろう。さて、もう一眠り。と、もう一度ベッドにダイブしようとしたのだが、俺は、自分が全く眠くない事に気付いた。

こういうこともあるのだな、仕方あるまいと俺は諦め、朝食が用意されているであろう食卓へ向かった。

お袋はもう仕事行つちまつただろうな。  
朝日を浴び、余裕かまして食うハムサンドってのもなかなかおつなもので、感慨にふけりつつ、俺は自分が、今とてつもなく気分がいいことに気付いた。

たまには、じうじうのもいいかも知れんな。久しぶりに遅刻を回避できそうだ。

俺はあつという間にハムサンドを平らげ、手持ち無沙汰を満喫していた。

たまには、ゆっくりと歩いて学校に行つてみるか。

ポケットに例の物が入っているのを確認し、俺は悠々と家を出た。

たまにはこういうのもいいものだ。朝日を浴びて、悠々と、散歩気取りで土手道を行く。

と、ここで左右前後を見渡し、誰もいないことを確認し、俺はポケットから例の物を取り出した。

赤い飾りに軽く触れてみると、ライトセーバー的な自動組立を見せ付けつつ、それは剣の形に変化した。

「うむ……。」

思わず唸るね。詳しくは知らんが、どうやら大剣に分類されるであろう類の剣だ。大きさは俺の身長より少し小さめで、両手で持たねば支えきれんほどの大きさと重さを誇っている。

さて、いよいよおかしくなってきた。

怪しいことこの上ない謎的機関やら、情報ナンタラやら、そこいらまでは頑張れば何とか飲み込めた。だが、俺を殺す気満々のイカレ変態がいるのであれば話は別だし、それに対応すべく俺にこんな物騒なもんを持たせ 偽もんだがな しかも背後には本物の剣も待ち構えていることだろう。

まあ……な、確かに楽しいさ。俺が長年ずっと求め続けてきた、非日常との邂逅を果たしたわけであるのだから。  
だが、自分が、本心からこれを楽しんでいるとは思えないんだ。  
変な言い方だが、なんとなく概要の分かつていてRPGを暇つぶしにやつてるような、そんな感じさ。

そう思い始めたのも、神無月と出会つてから。  
彼女は、こう言つた。『私は真実を伝達するだけ』と。

真実。

どうやら、まだ半分くらいしか伝達されていない的な話の、なんか中途半端感がムラムラしている、そんな真実。  
そこに、何が隠されているのだろうか。

「…………！」

十一時の方向に、一般人 この言い方も、今の俺に許された特権だを発見。さて、一般人がこれを見たらどう思うだろうね。……まあ、少なくとも俺にとつてはいいことではないはずさ。

そんなわけで、俺は急いで飾りに触れ、折り畳み傘小になった剣をポケットに滑り込ませ、何も無かつたかのように土手道を歩き出した。

…………

もうひとつと家で時間をつぶしてから来ればよかつた。

誰もいない教室を見て、まず初めに思ったことはそれだった。

「…………うむむ」

立っていても仕方ないので、俺はしぶしぶ席に着く。  
さて、何をしようか。

宿題でもやつとくかな、と数学の教科書を出してはみたものの、元来俺はどつに理系の道を諦めた男であるので、数秒でこの行為を後悔し、頭痛がし始めるコンマ五秒前に、辛うじて教科書を閉じ、すこしへマシな教科、英語の教科書を出した。

久しぶりに日常的なアレに戻ることが出来た。なんだか、この清潔しい気分は。

どのくらい経つたのだろうか。英語のノートは相応の文字で埋まり、宿題は全て終わっていた。英語の先生がニヤニヤしながら出した宿題を完遂してしまった、ということは相当の時間が経っているはずと思いきや、時計を見た限りではまだ十五分も経っていないなかつた。シャープペンを投げ出し、大きく伸びをする。

と。

「うおっ！？」

じつこう反応も無理の無いことだと分かつて欲しいね。  
なんてつたって、俺の横に、興味深げに英語のテキストを覗き込む神無月沙紀の顔があつたのだから。

「……」

相変わらずの無表情、三點リーダと共に。

「……どした？」

「……別に」

そつけなく言つと、彼女は自席に座つた。

「……」

いや、ホントつかみどりのない女だな。

そう思つたのだが、神無月は急に、だがゆつくりと首をこぢらむけた。

「うわ」

「うわ、とは？」

彼女は首を五三ほど傾け、だがすぐに言つた。

「うわ？」

疑問形になつただけじゃないか。

「第一ヒントをくれ。」

「……調子」

「調子が何だつて？」

「調子、どう?」

「ああ」

「そんな」とを言つていたのか。

「いいとも悪いともいえないが、どちらかといえば、そうだな、良好だな。」

「そう」

それだけ言つと、彼女は机から本を取り出し、黙々と読み始めた。少なからず、神無月が読む本に興味をそそられた。

「……なんだそれ?」

「……。」

彼女は無言で分厚い本を俺に向けた。なにやらよく分からんカタ力ナ言葉がずらりと並んでいる。

「何の本?」

神無月は少し考えるような間を空けてから、

「SFに分類されるもの」

SFだろ?

「そう」

「そうか」

このまま沈黙の時間が流れ始めるのかと思ったのだが、彼女は再び唇を割つた。

「今日、放課後校門にいて」

「何を

「一番のついつ!!」

そんなことを怒鳴りつつ、教室にすかずかと入つてきた、全く空気を読めない超どあほうがいた。

「あれ、ソーヤ? おお、神無月さんも……やつぱお! 一人さん、デキ

ちやつてんじやないの～？」

そんな無礼千万なことをつかつにも口走ったのは、ほかならぬ川口。「憶測も対外にしどけ。俺はただ関係代名詞の何たるかを神無月にご教示いただいていただけだ」

おつと、俺、ナイス嘘。

「神無月さん、マジすか？」

神無月、首肯。お前最高。

「へええええつ？」

彼は胡散臭そうな顔をしていたが、やがて諦めたように席に鞄を置き、数分はこちらをちらちら見ていたが、やがて机に突っ伏し、ぐーすか居眠りを始めやがった。その間、続々と生徒らが登校し始め、かくして俺は神無月に聞くチャンスを失ってしまった。ま、放課後になりやわかることや。

## 第十六章 感謝

さて、放課後。

俺は校門の前に、背をもたれる形で立ち、神無月沙紀を待っていた。次から次へと流れてくる人海に眼を凝らし、神無月の顔を捜した。

「む

神無月がいた。こちらを向く。

「おす」

「……待つた？」

「いや

実際には十分は待つた。

「そう」

そういうなり、彼女は歩き出し、そして俺の顔を見た。ついて来い、という意思表示だろう。よし、ついてついてやるうじやないか。さて、今日はどんなお話が拝聴できるのだろうかね。楽しみに待つことにしようか。

しばらく歩いたが、その道は俺の帰り道とは違つ道だった。どこに連れていくつもりなのだろうか。

「……。」

しかし神無月は相変わらずの無言。

「……神無月」

「なに」

彼女は首を全く動かさずに言った。

「これから、俺を……どこに連れて行かせるつもりなんだ?」

彼女は俺の方を向き、そして指で大きなマンションを指差した。

「そういう意味じゃなくてだな……。」

「私の家」

「ぬっ!?

「大丈夫」

何がだよ。

「誰もいないから」

もつと困るわ。

「？」

「いや、なんでもない」

「そう」

「……」

「……」

「……入つて」

そんなこんなで、気が付いたら俺は神無月の家の玄関の外にいた。

言われるがままにはいる。

そして、眼にしたものは。

「…………」、こりゃねえだろうよ…………。

完膚なきまでに殺風景な部屋だった。

大きめのテーブルが一つ。

あとあるのは、座布団とか、座布団とか、座布団とか。  
教科書が散乱し、服が散乱している俺の部屋とは好対照だ。  
俺に座るように促し、神無月はキツチンに姿を消した。

「…………よくこんなで生活できんなあ…………。」

それが素直な感想だ。テレビもない、パソコンもない。しかもカーテンもない。寝室を覗いてみたかったが、もしそこにカラフルな壁紙とふかふかの、かつ色とりどりのベッド、しかもそこに熊のぬいぐるみがあつたなら、俺は一円くらいで培つた神無月のイメージを、また位置から再構築しなくてはいけなくなり、いくらなんでも面倒なので諦めた。

そんなことを考えている間に、神無月がお盆にお茶を一つ載せてやつてきた。そのためだったのか。

俺が立つて受け取ろうとするとき、神無月は

「いい

と固辞し、なおかつ

「お姫さん」

とまで言つてくれた。さすがのお前にも、意思表示は可能か。

「そうか」

俺は神無月が淹れてくれたであらう茶を受け取り、それをすすつた。  
……普通に美味であったが、それでも、俺の懷疑心は晴れなかつた。  
「でも、今日はどんな話を拝聴できるんだ?」

「……。」

「すず、とお茶をすすつてから、彼女は言つた。

「昨日の続き」

「あの話しの、残りの半分をここで聞けるのか?」

「……全部ではない。一部を残して、でもその一部以外は全て話すつもり」

「残りの一部は?」

「……後で」

「そうか」

だが、若干の気落ちは、多大な好奇心に埋め尽くされた。

「じゃ、その一部以外を話してくれ。」

「了解した」

そういうと、彼女はいつたん上を向いた。

「いま、現実世界は消失の傾向を見せてている」

だから、なんで大事そうなところをさらりと言つ。

「あなたが元いた世界は、消失しつつある。」「消失う?」

「そう」

「また、なぜ。」

「現世は、一つしか存在し得ない。それが、世において最も底流の原則。しかし、今、この世には二つの世界が存在している。」「俺がいた」と「ここか」

「そう」

「で？」

「その原則が破られる」とはありえない。だから、どちらかの世界が消失する」ことが必然

「……」

「だから、あなたがもといたほつの世界が消失の傾向にある」「なんでここじゃないんだ？」「……」

神無月は、迷うような いや、迷っていた。でも、そんなのも一瞬だった。

「あなたがいるから」

「は？」

「今、あなたがここにいるから、あなたが存在していない向いの世界は消失せざるをえなくなる」

「なぜだよ」

「今まだ」

「そうか」

「そう」

「それを防ぐ術はあるのか？」

「なくもない」

「どうすんだ？」

「あなたがあつちの世界に戻ればいい」

「そんなんでいいのか？」

「いい」

「そうか、簡単じゃねえか。  
んなわけねえだろ。」

「どうやって戻りやいいんだよ。」

「鍵を握っているのは、水無月飛鳥との一団」

「そうか」

「でも」

「と、俺の安堵を制した。」

「私が言つてゐる消失、といふのは世界を構築していける情報の完全な消滅。こぢらの世界の情報が確固たるものになり、揺らぐことのないものになつたその瞬間、向こうの世界は消失する。でも、あなたがそこに戻れば、崩れた情報は元通りになり、この世界は消失する」

「……そつか、この世界か向こうの世界か、どちらかは確實に消えるんだな。」

「そう」

「待てよ？」

「じゃあ、もし俺が向こうの世界に戻つたとして、飛鳥達も消えるのか？」

彼女は表情を変えずに言つた。

「彼女は、もともとこの空間ではないところから来たから、彼女らは彼女らの世界に戻るはず」

「そつか。」

それなら安心だ。

「あれ？ でも……？」

「神無月は……？」

彼女は、少しさびしげな表情になつた。

「……私の任務はこの世界を無に帰すこと。でも、私には帰るところがない。だから、私も、一緒に消える。」

「……」

「マジかよ……！？」

「でも、別に大丈夫」

？

「私は、本来どの空間座標においても存在し得ない者。それをあなたは私を創造してくれた。一瞬でも、この世界に存在することが出来た。しかも、あなたに会うことも出来た。……思い残すことはない。本来、このために生み出されたのだから。」

そう言つて微笑んだ。が、どこか哀愁を漂わせる笑顔であつたこと

は、気のせいではないだろう。

「……お前も、一緒にあつちの世界に戻ることは出来ないのか

「なぜ?」

「なぜって……。」

俺は答えに窮した。

「……私のことなら、大丈夫。」

「……そうか」

「うとしか答えられなかつた自分を、俺は本心から恥じた。

「だが、な」

その気持ちに応えるように、俺は言った。

「行けるんなら、行こうぜ。俺と一緒に。お前だけ消すなんて、そ

んなさびしいことはさせねえから。」

彼女は顔をミリ単位で傾け、言った。

「……了解した」

そして、こうも。

「ありがとう」

## 第十六章 感謝（後書き）

なんかベタな章の名前になってしまいましたが、それはただ、自分の脅威的なネーミングセンスのなきよるものなので、ご勘弁！

## 第十七章 奇襲

そんなこんなで、俺は神無月の家をお暇した。俺が家を出ると、なぜか神無月は俺を心配そうに眺めていたが、気のせいだろ？  
さて、よく分からぬところに来てしまった。

こちらの方にはあまり来たことがないので、迷子になる確率がない。それは避けるべき事態だろ？ この不安定な状況で とうより、高校生として迷子はまずい。

だが、家がどっちか分からぬほど、俺は方向音痴ではなかつた。  
「行くか」

結果から言おひ。

なんというか、まあ、アレだ。いわゆる……その、迷子つづりものになつてしまつた。

言い訳じゃないが、この世界の地理は、微妙に齟齬が発生しているらしく、要は、いつもと違うってことだ。  
というわけで、今、俺、迷子。

困つた。

多分、俺の頭脳が指示しているであろう方向は、家にはたゞり着かないであろう。これも情報操作のなせる業なのかもしれない。適当に、進めば進むほど、より一層迷子ポイントが上昇している気がする。

「ふう」

疲れた。

……そういえば、ここ、来たこと、というか見たことないな。  
RPGにでも出てきそうな、絵に描いたような路地裏。  
少し怖くなり始めた、その瞬間。

「……！」

後ろに気配を感じた。少し躊躇してから、一気に振り向く。

最初、そこに何がいるのか分からなかつた。

よくみてみると、黒ずくめの男が立つていた。……死神のような服装で。

「……また、会つたな。」

「こつちはもう一度ごめんだったけどな」

気障な仕草で、髪を払つた。

山で出会つた、あの変態。

俺に記憶媒体を渡した。

「……周防」

「おや、名前を知つてゐるのか？名乗つた覚えはないのだが。どうせ水無月かその類だらう？」

そういうと、彼はフードを取り、あのいけ好かない顔をあらわにした。

が、その顔は、かつてのこいつとは、だいぶ違つてゐることに気が付いた。

凍りつくような、殺氣さえ漂わせているかのような眼。

不敵な笑み。

背筋に悪寒が走つた。

「だが、今、お前は独り。水無月がいなければ、お前は何も出来まい？フフ、己の無力さに気が付いたか？だが、もう遅い。……貴様は、時空の壁から生まれてしまったハブニング要素。我々はハブニング要素を消去する義務がある。」

は？

そういうと、彼はポケットから軍隊に採用されてそうなこつゝナイフを取り出した。今だからこつゝえるが、その時の俺の驚愕は想像を絶するほどだつた。

「フフ、俺らは認めてないとはい、貴様も神と呼ばれた男だ。相応の敬意を表すのが筋である。神よ。世界の安寧のために……消えたまえ。」

今……なんつた？

その答えにたどり着く前に、俺は信じられない光景を目にした。

そいつが、ナイフを腰に構え、突進してくる。

「うわっ！」

間一髪、俺は身をよじらせて彼の攻撃をかわした。

今の一閃、完全に本気だつた！

「フン、かわすか。……それもよからう。今の行動が吉と出るか、凶と出るかはまた、お前ではない、違う神しだい。お前が本物かどうか……確かめてやるう。」

感情を感じさせない語調で、彼は再びナイフを構えて突進してきた。

が、今度は俺にもいくらか余裕があつた。横方向に飛びのき、必殺の一閃をよける。

「待て、わけが分からぬ！俺を殺す？神？まずそれを説明しろ！」

「……水無月達は、まだ言つてねえのか？」

「ああ」

「……フン、いかにもあいつららしい。お前の正体をまだ教えていないとは……。

なら、どうせ水無月自身の正体も明かしていないのだろう。フフフ：ハハハハ！これはいい。お前は何も知らず……ここで何をしていたのだ？異次元ごっこか？残念ながら事はそんなに甘い物じゃない。むしろ深刻なことだ。それをなあ……。ハハハ！」

「勝手に話を進めるな、俺にも理解させる」

フフ、とまだ彼は笑いを残し、そして冷酷に言った。

「山で会つたとき、言つたるうつ？次に会うときは敵同士、と。敵が敵に機密情報をもたらすとでも？お前は、黙つて……死ねばいいのさ。真実を知ることなく……な。」

ふざけるな。

「おお、そうだ、あれがあつたではないか。

ポケットから、そつと、それを取り出す。

「何をしている？」

「こんなことをしてゐるのさ」

そう言い、俺は飾りに触れる。

折り畳み傘小の物体は、そして一気に剣になつた。

とりあえず構えてみた。

「む……。」

彼は面食らつたようだ。が、それ逃げる、と思う間もなく、彼はまた冷酷な微笑を顔にたたえていた。

「フン、おもちゃか。くだらん。どうせ水無月の入れ知恵だらう？だが、あいにく、俺はそんなのでビビるほどおろかな人間ではない。おろかなのは、むしろ、お前のほうだ。」

なにお、これだつて殴られりや痛いぞ。

「殴られれば、の話しだ。……そうだろ？？」

そう言うなり、彼は突進してきた。

避けるのは、間に合わない。

「くそつ！」

剣を前に、かばうように立てる。致命傷は避けられるだらう。ガキイン、と鈍い音が鳴り響き、俺の手には既に剣がなくなつていた。

後ろで、カラーンカラーン、という音が聞こえてきた。

「む……。」

「フフ、バカが。……もう少し楽しませてくれると思つていたが、的はずれだつたようだ。」

俺は右上3メートルくらい先におつきな木の棒があることに気付き、急いでとりに行く。

ただでは死なんぞ。せめて道連れだ。

「さあ、死ね。」

また彼は突進を敢行した。俺は渾身の力を込めて、木の棒を振り下ろした。

ザクッ、と小気味いい音がした。

恐る恐る木の棒を見てみると、……変態野郎のナイフが刺さつてい

て、その変態はといつと、やはりそのナイフの柄をつかんだまま、硬直していた。

そのまま、俺は思いつきり棒をひねる。

「うらう！」

「ツー！」

カラーンカラーン……。

彼の顔は驚愕に染まり、木の棒の先には、ナイフ……の刃が付いていて、少し下を見ると、柄らしきものが転がっていた。

勝った。そう確信した。

だが……、なんだろう、この余裕は。まるで、自分は絶対に死ない、とか確信しているかのような心境であった。

「……今逃げるのなら、見逃してやつてもいいが……？」

実は、前から言つてみたかった台詞の一つである。

だが、彼は冗談を、みたいな顔になり、こういった。

「フフ、これで勝つたとでも……？」

そういうと、彼は何かぶつぶつぶやき始めた。

何を……と思つたが、それはすぐに確信に変わつた。まずい。アレか。

完了する前に、勝負を決してやろうじゃないか。

そう考えると同時に体が動いていた。

彼の脳天めがけて、思い切り棒を振り下ろす……！

ギイン、と鈍い音が響いたが、それは頭を直撃して鳴つた音ではない。俺は瞬時にそう判断し、とっさに後ろの飛びのいた。さつきまで俺の首があつた位置に、ナイフが空を切つた。

「……間に合わなかつたか」

「形勢逆転だ」

俺が手に持つていたはずの棒は、いつの間にか半分以下の長さになりました、すっぱりと、まるで刃物で切られたようにきかれている。

そして、彼は手に前よりも一周りくらい大きく、ゴツさも頂点に達した、ナイフというより短剣を手に持ち、顔をゆがめて笑つていた。

「ふん、俺としたことが、思つたより手間取つてしまつた。だが、今度こそ終わりだ。」

「ああ、终わりか。と、なぜか納得してしまつた。

俺の人生が、ではない。この戦いが。

彼はつかつかと俺に歩みより、ナイフを高く掲げた。

彼は勝ち誇つた顔をしているが、なぜか俺の中には絶望、といった言葉はなかつた。

変わりに、早く来い、という気持ちが満たしていた。

「俺は何を待つてゐるのだろう。自分でも、分からぬ。」

「死ねッ！」

だが、そのナイフは俺の心臓を貫通することは出来なかつた。……

むしろ、俺の体にさえ、触れることは出来なかつた。

目前にあるナイフの刃を見てみると、白い手が刃をつかんでいた。素手で。

その手の先を追つて、下へ眼を向けていくと、そこにはしゃがんで、手だけ伸ばした神無月がいた。

相変わらずの、無表情で。

ああ来たな、となぜか俺は安堵した。

「なにつ……！」

彼はもう、驚愕をすっぽ抜かして愕然、といった感じだ。

「神……無月……？」

だが彼女は彼の顔ではなく、俺の顔を見ていた。

そして、淡々と、

「助けに來た」

とだけ言つた。

痛くねえのかよ、という間もなく、彼女はその細い腕のどこにそんな能力が、と思いたくなるくらいの力強さでナイフをどんどん周防の方へ押し返すと、そのままナイフの刃を折つた。

その刃を、そのまま周防の首筋に当つた。

「……あなたの負け」

と、自分のことではないような口調で言った。

「どうする？」

と、俺に聞いてんのか？

「そう」

「こいつか？」

「そう」

「……好きにしろ」

「了解した」

そういうと、彼女は刃を彼の首筋から離し、向こうを指さして、

「行け」

とだけ言った。

「……くそつ。」

とだけ言って、彼は逃げ出した。

## 第十七章 奇襲（後書き）

この小説を書き始めてから、ずっと胸に留めていたこと。それは、『この中に、一度くらいは戦闘シーンを入れる』、『その条件として、大剣が出てくること』とこうものとして、それが実現したという意味では、まあよかつたかなあと。やつぱり一つくらいはこうゆうのもないといかんぜよ的な思想を持つ野郎なんで。自分は。おかげでだいぶ不自然になってしまいましたが、ここにはポジティブ思考で行きましょう。

第十八章 TRUTH（前書き）

最近更新しました。

## 第十八章 TRUTH

「神無月、……手は？」

「大丈夫」

と、本当に何も無さそうに言った。  
でも、どう見てもだいじょうぶじやねーだろ。  
と言おうとして、そして彼女の手を見て驚愕した。  
傷がねえ。

血すら出でない。

神無月……こいつは人間なのか？

「そう」

じゃあなんで手、なんともねえんだよ。

「治した」

「情報操作ですか？」

「そう」

そんなことも出来るのか。便利だなあ、情報操作。というか、神無月もやっぱ使えたのか。さすが。  
つて違う。俺が言いたかったのはそんなことじゃない。

「神無月」

「なに」

瞬時ためらつてから、俺は言つ。

「ありがとな」

「……別にいい」

そういうと、彼女は顔を背けた。照れているのか、と思ったが、違つたようだ。彼女は心底なんでも無さそうに

「任務」

とだけ言つた。

「俺がお前に科したのか？」

「……そう

「……神無月」

俺はこの場を、「まかすよ！」と言った。

「なに」

「一緒に戻る？」

「え？」

彼女が、始めてその闇色の瞳に疑問の色を呈した。

「元々の世界に。」

「帰りたい？」

「……ああ。だが、絶対条件がある。お前と一緒に、帰ること、だ。

「……了解した。」

神無月は、確かにそう言った。

「お前と共に戻る術はあるのか？」

「なくもない」

「まだ、禁則か？」

「もう既に解除された。」

「……なぜだ？」

「あなたが、帰りたいと望んだから。」

わけ分からん。でも、俺にとつて重要なのは理由の如何でなく、禁  
則か否かのみだから、ここではスルーしよう。

「……どうか。で、どうなんだ？」

「可能」

「どうやって？」

「手段はとても単純。あなたがただ、心の底から帰還を願えばいい  
だけ」

「なぜだ？」

「あなたがそう思つ」とで、必ず何らかの形で願望をかなえる能力  
が歪からあなたに供給されているから」

なぜ俺が つと、その前に。

「そつか、じゃあ、向こうの世界に戻る方法は？」

「……話は長くなる」

彼女はこちらに顔を向け、

「いい？」

といった。  
もちろん。

「そう」

彼女はひと呼吸置いてからはじめた。

「そもそも、この空間が出来たのは、さつきの時空間の歪が大きな要因。あなたの能力を供給するのもこれで、水無月たちの強行の原因もこれ」

水無月 飛鳥か。

「その歪は、もともと存在しえなかつたものを生み出し、それが、また存在しえなかつたものを生み出すという連鎖反応を引き起こした。これは水無月らにとって大きな問題。彼女らは、今までに起つたこと、そしてこれから起るであろう事を全て把握した上で生活をしていた。でも、その歪の出現によって、彼女らの把握していた事柄はすべて虚無に帰し、他に新たな 運命が生まれた。でも、その運命は一定ではなく、場合によつては全てが崩壊することもありえた。彼女らは、何度も、歪をふさいだとした。だが、出来なかつた。彼女らの情報操作の全てを引き出しても、不可能であった。それだけ、歪は神的な存在だつた。彼女らは穴をふさぐことを半ば諦め、歪が生み出したイレギュラー因子を排除すべく動き出した。「イレギュラー因子、とは?」

当然な疑問だ。お前もそう思うだろ?……俺だけ?

「存在するだけで、未来を変えてしまう力を持つもののこと。」

「そんなんのが、俺らの世界にいたのか?」

「そう」

「……。」

「イレギュラー因子を取り除くために、彼女らは一つの組織を結成した。が、彼女らのやり方が気に入らない一部の者たちはそれを抜

け出し、新たな組織を作った。その一組織の幹部に当たる人間が、

水無月飛鳥と、周防忠竜

「！？」

飛鳥はともかく、あの変態も結構な地位にいたのか。  
つて、なんか論点がズレてる。

「水無月らは、穩健派。彼女らの排除の対象に入っている因子は、他のどれよりも因果性が強く、下手につづくと大爆発も考えられる、不安定なものだつた。その因子は、自らの願望を情報操作よりも高度なもので実現することが可能であったが、完全ではなかつた。それは、向こうの世界で『亞神』と呼ばれている。」

「亞神……神に継ぐ神、か。」

願望を実現する能力、か。それならどんなものでも瞬時に手に入る  
わけだ。いいな。

「であるから、彼女らは排除はせず、出来る限り因子を自分たちが  
コントロールしうる位置にもつて行きたかつた。でも、出来なかつ  
た。全てを無意識のうちに知る『亞神』がそれはいやだと無意識下  
に望んだから。だから、それが生活するのを見守るしかなかつた。」

「……因子は、生き物か？」

「人間」

「……！」

「そのうち、彼は毎日生活に飽き足らなくなり、一つの世界を創  
造し、そこに自らを組み込んだ。」

無意識でか。

「そう。無意識である彼と、普段の彼は別物と考えても支障はない  
かもしれない。」

「彼つつうと、男か。」

「そこはさまざまなもので、イレギュラー因子が満載され、彼女らにとつて  
は破滅を導く空間であつた。彼女らに出来ることは因子の危険度を  
可能な限り下げる」と。

神無月は一瞬間を空けた。

「……でも、周防たちの組織は違つた。彼らは、因子は因子、バグでしかなく、排除すれば言いだけだ。そう考え、その因子を排除しようとした。でも、それも出来なかつた。因子　彼はそれを望まなかつたから。」

「……！」

「……それって……。まさか……」

「……。」

神無月は少し表情を緩めた。微笑には届かぬ笑い。

「……あなたが今考えていること、それが真実」

「俺なのか？」

「そう」

「……待て、望むも何も、俺はこんな世界を作りたいなんて思ったことないぞ？　それなのに、なぜだ？」

「あなたはそう考えているかもしれないけれど、無意識のうちにあなたの本能は非日常との邂逅を求め、あなたの理性は躊躇した。その躊躇が、あなたを元の世界に戻すための鍵を残した。」

無意識つて。

「鍵、つてのは？」

「例えるならば、私

当意即妙の答えに圧倒される俺をよそに、彼女は電波的演説を続けた。

「あなたの理性は、本能にその決断を委ねた。もしあなたが戻りたいと欲するのならば、あなたは鍵を探索し、もしあなたがここ永久的な滞在を望んだのならば、あなたはずつとここにいるであろう。どちらにしてもあなた自身が望んだことなのだ、とかく干渉する必要もあるまい、と。しかし、あなたの本能は迷っていた。」

「……俺の気付かぬ意識の中で、そんな葛藤があつたと？」

「そう。そしておきたことに対する要因を、情報操作による世界の改変と水無月飛鳥は説明したが、それは虚構」

「……！」

「情報操作は存在するが、それによって世界が改変されたわけではない。」

「……。」

「あなたの意識は、この世界においては、もはや神。」

「……！」

「神だと……？」

「ここは、あなたの創造した夢想世界。長期間の夢想世界の滞在は、世界の消失を意味している。」

「なぜだ？」

「あなたがそこにどどまり続ける限り、現世の情報は少しづつ蝕まれて行くから。」

「？」

「現世に存在しつる情報量には飽和量がある。この世界を構築するためにには、元の世界の情報を消去しつつ、こちらに情報を再構築する必要がある。すなわち、あなたのいない世界は消失し、神のいる世界は保持される。あなたの深層心理は、そう願っていた。そしてすべてのことを知っていた。あなたが罪の意識にさいなまれないようにするためにも、あなた自身に気付かせないようにしていただけで。」

「わけわかんねえよ……。」

「それらの全てを説明することは、私の情報伝達能力では不可能」

「……そうか。じゃあ、いいじゃないか。俺が向こうの世界に戻れば、この世界は消滅するし、元の世界も保持されるし、飛鳥たちも困らずに済む。お前も、孤独じゃなくなる。丸く収まるとはこのじじゃないか。」

「でも、戻ることは難しい。」

「……なぜだ？ お前、さつや……。」

「ああは言つたけど、帰るために他にも条件が必要」

「なんだ？」

「『J』から元の世界に帰るには、ギャップがありすぎる。あなたの、『J』で起こったすべてのことに関する記憶を消去した上じゃないと帰ることは許されない。」

許されないって、誰にだよ。

彼女はよく意味のわからないものを口にした。  
つて待てよ。

「……じゃあ、お前のことも忘れるのか……？」

「たぶん」

「拒否権行使するぜ。お前の記憶を失つてじゃあ……」

「なに？」

「いや、なんと云つか……」

なぜかあせる俺を神無月は不思議なものを見る目つきで見る。やめろ。その目。

「とにかく記憶は捨てたくない。何とかならないのか？」

「……不可能ではない。あなたの中有る、『常識』にかみ合わないものに関する情報さえ抹消できれば、残りは持ち帰られる」

「……そうか。どうやって抹消するんだ？」

「私の力だけじゃダメ」

「誰がいればいいんだ？」

「水無月飛鳥」

「えつ……、いいのか？」

タブーなんだろ？

「……やむをえない。だけど、どちらにせよ彼女の助力は不可欠。」「なぜだ？」

「あなたを元の世界に戻すのも、あなたが望むだけではダメ。」「さつきまでの余裕はいづこく。」

「Jの世界とモトの世界の間には大きな断絶がある。その断絶を、情報操作で出来る限り減らさないと出来ない。その操作に要する情報操作能力量は、普通の人間三万人分」

「……」

とてつもねえ。

「私と、水無月が共にやれば、何とかできるかもしれない。でも、成功は保障できない。」

「失敗したらどうなる？」

「時空断絶に巻き込まれて、永遠にそこをさまよいつことになる。空恐ろしいことをさらりと。」

「やめたい？」

彼女は俺の顔を見て、試すように囁いた。

「まさか」

俺は大きく息を吸い込んだ。

「やつてくれ。」

「了解した」

彼女はひと呼吸あけてから言った。

「では、私を水無月飛鳥の元に導いて欲しい」

「……俺が？」

「そう」

「……でも、あいつと合流できるのは明日だ。」

「心配する必要はない」

そういふと、彼女は空を指差した。

「……もう〇時」

「……は！？」

時計を確認。十一のところに針が一つ。どうやら重なっているらしい。ちなみに彼女は時計をしていなかった。どうやって知ったんだろうね。世界七不思議のひとつに混ぜるべきだ。神無月そのものの存在を。

「……そんな時間たつていたのか？」

「三十分もたつていなかつたが。」

「ここは、周りの世界と少し隔離された異空間。時の流れも、周りより早い」

そうだったのか。

「 あら、こいつはとない、……こくへん。

首肯。

公園に。

## 第十九章 浮沈

「ここは公園だ。

時計がやつと〇時半を指していたにもかかわらず、彼女は既にそこに入った。

彼女は神無月を見て驚き、神無月は相変わらずの無表情、俺は一生懸命に神無月との関係、いきさつを話した。

「……ですか、全て知ってしまったのですか……。で、あなたはもう帰りたいんですね？」

「ああ。」

「そのためには、私と、神無月さんの力が必要だと。」

神無月、首肯。

「そうですか。……よかつた。またか自ら戻りたいとこりとは思いませんでした。」

「でも、教えてくれりやよかつたのに。」

「まさか、教えるはずがないじゃないですか。そんなことしたら世界がどうなるか、想像も出来ませんよ。」

飛鳥は軽い笑顔で微笑む。

「そうだな。……じゃあ、神無月、そろそろ始めてくれ。」

彼女はこちらを振り向き、だが、その顔には今まで見たことないようなオーラが刻み込まれていた。

強いて言うなら……激昂。

「……間に合わなかつた。」

ちょびつとだけ感情がこもっているその声に、俺は多少の……ってんなことはどうでもいい。なんだ？

「元の世界の情報が、完全に消失した。」

「えつ！？」

これ飛鳥。

「どういう意味だ？」

こんな空気を読めないバカ的発言をした人間は、もちろん俺だ。あの……飛鳥はもう頭かかえちゃってんんですけど……。

「元の世界の存在情報が消失した。元の世界に戻る」とは不可能「そーゆーこと。って。

「はー? そりや……まあいんじやないのか……?」

「まあい」

「何てことだ……。」

元の世界に戻れないって事じゃないか。

「……冗談きついぜ……。」

俺は地面に座り込んだ。

「戻れねえのかよ……。」

黒川には、もう会えないのだろうか。  
俺を産んでくれ、いつもしみ育ってくれた両親にも、もう会えないのだろうか。

なんてベタな展開になつてきたな、と冷静に感じ取れる俺の脳神経に、俺は軽くビビッた。

だってよ、心の表面じゅう驚愕してるんだけど、奥底じゅう、全然動揺なんてせずに、『予定通り』なんてほざいてやがる。  
神無月が言つてたことは、こういうことだったのか?  
……そろそろ、解決策が……そんな気が、

「あつ……」

彼女の鶴の一聲が響き渡つた。深層心理は『ほづらね』とか言つて  
いる。

「もしかしたら……うん、大丈夫かもしれません!」

俺と神無月の視線を左右から受け、一瞬ひるんだが、彼女は続けた。  
「この世界を基盤にして、元の世界の情報をここに再構築してしまえば……時空修正は可能かも……。」

「でも、そのような大事業は、私とあなただけでは不可能。」

「俺もやるぞ。」

彼女らは少し驚いた顔でこちらを見た。

「俺だって、曲がりなりにも情報操作できるんだ。猫の手よりかは役に立つ可能性もあるだろ？」「少し待って。情報操作能力を審査する」

そういうと、彼女は俺の顔をじっと見た。まるで脳を透視しようとしているかのようだ。

「終わった」

すぐに彼女はそう言った。

「あなたは、普通の人間の約2万倍の情報操作能力を有している。あなたが加われば、成功確率も許容範囲になる」

「……よかつた……。」

飛鳥は安堵した表情を作った。俺には、彼女らがやろうとしていることがなんかよく分からんが。

「えっと、じゃあ役割を決めましょう。神無月さんは、記憶の操作をお願いします。私は微調整を行います。如月君は、元の世界には存在し得ないものの排斥をお願いします。」

「了解した」

「えっ、どうすりゃいいんだ？」

対極の反応。

「物質コードの代わりに、排斥コードを入れて、その対象を存在し得ないものにしてください。」

「……？」

「大丈夫、できるはずです。」

何を証拠にそういうことを。

「あなたの記憶媒体は、私の妹のものですから。」「妹？」

そんなんのがいたのか。

「もう……死んでしまいましたけどね。」「……！」

彼女の見せた、物寂しげな表情に、俺は驚いた。彼女は、ずっと笑つてゐるイメージあつたからな。

「妹は、優秀でした。でも……いえ、何でもありません。とにかく、私の妹ですから、大丈夫です。」

そういうと、彼女は哀愁とそれを「まかすかのような、表面のみの笑いを繰り出した。「のまま涙がスー、とこぼれてもなんら絵面に差し支えないような、とにかくそんな笑顔だ。

「……分かった。」

そういうしかなかった。

「では、行きますよ。」

「おつと、待つてくれ。」

「なんですか？」

「改変後、もう飛鳥たちとは会えないんだろう？」

「んつ、そうですね。」

じゃあ、言っておかなかなきやいけないことがあるな。

「飛鳥……色々と世話になつた。ありがと。それなりに楽しかつたぞ。」

「いえいえ、任務ですから。」

そう言って、彼女は笑つた。やっぱ、そつちのがお前には似合つてゐるよ。

「あと、神無月、お前にも世話になつた。また後で会おう。」

「了解した」

俺は深呼吸をして、意を決して飛鳥に言つた。

「……よし、いいわ。」

「分かりました。……では、歸せん、自分の仕事に専念してください。これからは会話は禁止です。……ようなり。」

「ああ。」

「さよなら」

そういうと、彼女らは眼を閉じた。さて、俺もやんないとな。

遠大な、この夜空は、向こうの世界にもあるだらうか。

中途半端な髪をした神無月は、向こうの世界で鎮座してるだらうか。

それを知るのは、後で、だ。

「シリアルコード0789、存在時空間座標G005にて異世界存在物質と認定されるものの情報排斥許可を……。」

飛鳥、世話になった。ありがとう。

日常を退屈だとしか思えなかつた自分が、今となつては信じられない。

ほとんどの人は、今。

「申請……」

自分の目の前にあるもので満足しているのだから。

光が闇と入れ替わる。意識が近づき、夢が消えた。

「おうあ？」

奇声を上げつつ、俺は覚醒した。「こりは……？」

シーツの白さが眼にしみる。

「こりは……保健室だ。」

そして、俺は全てを思い出した。が、どうやってここに来たか覚えていない。たぶん抹消されたんだろ？……お、でも抹消された、ということをちやんと覚えてる。つてことはだ。大丈夫そうだ。よかつた。

そして、俺がそう認識すると共に、一つ疑問が浮上してきた。

神無月は？

まあ、ここにはいまい。保健室を見渡してみたが、そうだった。先生はいないようだ。

ベッドから起き、窓に近寄る。そしてこの部屋の真向かいの教室に眼を凝らす。そこは、一年六組のはずだ。

いないか？

なんて、ここから見えるわけがないか。

俺は諦め、窓から田を離した。

「あら、如月君、大丈夫？」

保険の先生だ。もう少し感慨にふけりさせていただきたかったが。

「なに言つてんの。ほら、授業戻れる？」

大丈夫ッす。

「そう、じゃ早く合流しなさいよ。」

「うひつす

そういうなり、俺は保健室を出た。この廊下も、久しぶりな気がした。俺は教室へと急いだ。当たり前の現象だろう?

……おそらく、この世界は普通の、何の変哲もない世界だろ?。でも、それが退屈だとは、もう思わない、思えない。ほとんどの人が、今、田の前にあるもので満足しているのだ。むしろ、それは幸福でさえある。そつ、俺は教えられたのだから。なア……。神無月。

## 終章（後書き）

神無月は、教室の、俺の隣の席に鎮座していた。

俺が教室に入り、彼女と目が合つたとき、神無月がふと微笑んだよう見えたのは、錯覚ではないだろ？

うららかな日差しは春の完全なる訪れを告げ、俺の睡眠の促進にもつながってくれるだろ？

……とにかく、珍奇で倦怠な俺の体験談はこれで終わりだ。

神無月は、希望で満ち溢れた思いを馳せていることだろ？  
さて、じゃあ俺は。

何が起こるかわからない明日を心待ちにしていようじゃないか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4510d/>

---

\*\*\*UNINSTALL\*\*\*

2010年10月10日07時42分発行